資料紹介

# 荒川重平回想録抜粋

## 旧幕臣としての交友関係を中心に

Research Materials

樋口雄彦

ここに翻刻・紹介する史料は、幕末に誕生し昭和期まで生きた旧幕臣出身の一海軍教育者の回想録である。彼、荒川重平は徳川家に仕えた旗本の子であり、維新に際しては駿河に移住し静岡藩の沼津兵学校に入学した。廃藩後は上京し明治政府の海軍に出仕し、数学教師として海軍兵学寮―海軍兵学校、海軍大学校に勤務した。

彼は長命だっただけでなく、全一四冊に及ぶ大部の回想録を残した。少年時代から青年時代、すなわち幕末から明治初期にかけての回想録については、『国立歴史民俗博物館研究報告』第一三六集（二〇〇七年）に先に翻刻・紹介したところである。荒川回想録の概要については、すでに同集で説明を加えており、ここでは繰り返さないが、晩年になってから往時を回顧しながら記述されたものであるものの、日記等にもとづき極めて詳細に書き記された長大な記録である。

なお、もととなった日記は多くが失われ、現在は明治三六年（一九〇三）八月から三八年（一九〇五）八月までの一冊（「日記　十六」）などが残されているにすぎない。その一冊と回想録の記述とを比べてみると、日記の記述とほとんど変わらない箇所もあれば、かなり変更や加筆をほどこした部分もあることがわかる。たとえば、田口卯吉の死去について記した箇所（明治三八年四月一四日）は、以下のようになっており、後掲の回想録翻刻部分と比較してもらえばわかるように、明らかに回想録が日記に多少手を加えたものであったことがうかがえる。

○退出途中田口卯吉氏ノ病気ヲ問ヘバ昨夜既ニ死去、嗚呼哀哉。君ハ当世ノ名士ニシテ予ト沼津ニ在リテ乙骨先生ニ同塾タリシ、予レハ碌々、彼レハ明治ノ名士タリ、予レヨリ二三歳少シ、惜シミテモ尚ホ余リアリ

その一方、日記の同月一七日条に以下のように記されている葬式のようすについては、回想録では省略されている。

○故田口卯吉氏葬式ニ本郷中央会堂―耶蘇―ニ会葬ス、大雨中会葬者五六百人、榎本子爵、大隈伯、尾崎市長等アリ、牧師平岩氏、海老名弾正氏演説、島田三郎氏履歴朗読―涕涙―、満堂粛然、予亦禁スル能ハズ、沼津旧友ノ会スル者、島田三郎、三田佶、飯野忠一、遠藤信古、江原素六（君ハ生徒ニアラズ権参事ナリシ）及予ノミ。戦地ニ在ル古川宣誉、渡辺英興、横地重直氏等ハ勿論、陸軍々人タル者ハ来ラズ

もちろん、逆に、日記にないことを回想録に記した場合もあったであ

ろう。回想録は、日記を見ながら、不要と判断した事項は削り落とし、思い出したことを付け加え、文章を推敲して作成されたものといえる。

さて、全一四冊のうち、第一冊について、冒頭から途中までをそっくり翻刻した前稿に対し、本稿では、全冊の中から一部分を抜粋して翻刻することとした。抜粋は、筆者の関心にもとづき、旧幕臣としての交友関係を示す記事を重点的に行った。ただし、それでは断片的になりすぎるので、彼の人生において欠くことのできない各時点での重要な出来事、あるいは一般的な意味で特徴的な内容を持つ記事については掲出するようにした。また、時代を象徴する歴史上の重大事件にまつわる記載についても可能な限り拾うようにした。

ただし、あくまでほんの一部について抜粋したものにすぎず、ここに掲載した以外にも、家庭や個人に関する私的・日常的な事項、海軍での勤務に関わる事項など、他にも厖大な分量の記事があるわけであり、本稿が恣意的な翻刻であることは免れない。筆者が意図するところは、荒川重平という一人物を事例に、旧幕臣仲間や旧主徳川家との間で継承・維持された人間関係について着目し、近代社会を生き抜く上で近世の出自や由緒がどのような意味を持っていたのかを具体的に示すことにある。その目的のため、史料原文の翻刻は極めて限定的なものにならざるをえなかったことをお断りしておかなければならない。

本稿の価値は史料原文にこそあるが、その紹介前に、今回の翻刻部分から読み取れた諸事実のうち、幾つかのポイントについて指摘しておきたい。

まずは荒川の交友関係の特徴である。そもそも本稿が、旧幕臣同士の交友関係を中心に翻刻を行ったことは先に述べたが、そこに登場する各種の団体や会合について、目に付いたものをアトランダムに列挙すれば以下のようになる。A　沼津旧友会、謝恩会、阿部潜追弔会、江原素六古稀祝賀会（含赤松則良・乙骨太郎乙）、江原素六喜寿祝賀会、江原素六葬儀、B　静東会（旧幕臣出身の海軍関係者の集まり）、静岡育英会、育英黌、葵会（明治四四年九月設立の徳川宗家・三卿の家臣を一体とした親睦団体）、同方会、日光東照宮三百年祭、戊辰殉難者五十年祭、江田島会（偕老会）、静岡県出身学生大会、C　徳川慶喜公爵授爵祝賀、徳川家達邸茶話会、徳川家正結婚祝賀、徳川慶喜葬儀、徳川家達相続五十年祝賀会、徳川家達ワシントン軍縮会議壮行会、徳川慶久葬儀、徳川慶光授爵披露宴、秩父宮・松平勢津子結婚祝賀、高松宮・徳川喜久子結婚祝賀、徳川家達古稀・金婚式祝賀。仮にA、B、Cの三種に分類したが、Aは沼津兵学校の関係、Bは旧幕臣一般の関係、Cは徳川家の関係である。いかに彼の交際が旧幕臣としてのそれを基軸としていたのかがわかるであろう。

もちろん彼が形成した人間関係はそれだけにとどまらない。職場である海軍、その関連から派生した鹿児島県人や皇族とのつながりもあれば、当然ながら家族・親族もある。また、数学や禅・和歌・漢詩・謡曲など学会、趣味の上での交遊関係もあった。長期にわたる関係もあれば、一時的な関係もある。本稿ではほとんど省略したが、回想録には旅の記録も多く記されており、行く先々で出会った人々との交流も記されている。この回想録には、一人の人間が一生の間に取り結んだ実に多様な人間関係が描かれているのである。

翻刻を読む上で前提としなければならないという意味で、とりあえず、できるだけ公職関係の事項にしぼって彼の年譜をまとめておけば、以下のようになる。

《荒川重平略年譜》

嘉永4年（一八五一）　7月20日　江戸本所にて生まれる。
慶応元年（一八六五）　昌平黌の素読吟味で甲科及第。

慶応2年（一八六六）6月18日　歩兵差図役並勤方に任命される。
慶応3年（一八六七）12月　京都から江戸に帰還。
慶応4年（一八六八）4月　脱走軍に加わり、下野国へ転戦。
5月　軍を脱し江戸の自宅にもどる。
7月29日　小筒組差図役下役並に任命される。
明治2年（一八六九）4月3日　沼津兵学校資業生に任命される。
明治4年（一八七一）7月　勝海舟を訪ね、沼津兵学校退校を訴える。
8月　沼津兵学校資業生を免ぜられる。
9月20日　海軍兵学寮出仕を命じられる。
明治6年（一八七三）11月　兵学少助教に任命される。
明治7年（一八七四）4月　海軍少尉に任命される。
8月　兵学中助教に任命される。
明治9年（一八七六）8月　九等出仕・算術測量掛に任命される。
明治12年（一八七九）12月　海軍兵学校教授補に任命される。
明治15年（一八八二）10月　海軍兵学校教官（航海術兼数学掛）に任命される。
明治19年（一八八六）12月　海軍教授に任命される。
明治21年（一八八八）8月　江田島の海軍兵学校に着任。
明治30年（一八九七）12月13日　海軍大学校教官に転任。
明治33年（一九〇〇）7月14日　海軍教育本部御用取扱を命じられる。
明治35年（一九〇二）11月14日　海軍教授を勅任とすること、欧米に駐在させることなどを校長に建白。
明治37年（一九〇四）2月24日　水路部御用取扱を命じられる（翌年8月14日差免）。
明治38年（一九〇五）8月16日　海軍普通学教育視察のため欧米各国出張を命じられる。
9月23日　横浜を出港。
10月9日　アメリカ・サンフランシスコ着。
11月13日　イギリス・プリマス着。
明治39年（一九〇六）1月3日　フランス・パリ着。
3月25日　横浜帰着。
3月26日　本省出仕を命じられる。
明治40年（一九〇七）7月30日　依願免官。
明治41年（一九〇八）1月　荒川宅で四両会の第一回会合を開催。
4月1日　自宅に奨学舎と名付けた寄宿舎を置き、鹿児島県出身学生のため海軍兵学校受験準備教育を始める。
5月　沼津兵学校旧師を招いて謝恩会開催。
明治44年（一九一一）5月22日　伏見宮博義王の海軍兵学校受験指導を担当する（大正3年9月入学まで）。
大正7年（一九一八）3月20日　鹿児島県出身者のための進学塾である造士舎の教師を退職する。
昭和2年（一九二七）5月　自叙伝編輯を開始する。
昭和8年（一九三三）12月25日　八三歳にて没。

回想録の上では、全一四冊あるうちの八冊目で現役からの引退（明治四〇年七月）を迎えている。ということは、残り六冊はすべて第一線を退いた後の記録ということである。現職時代の記録としての意味もさることながら、退職後の余生の記録としての比重が高いのである。各種の親睦団体、趣味の会等への参加は、現職時代からあるにはあったが、やはり退職後に一段と盛んになったといえる。先に列挙した旧幕臣・徳川家関係の集まりに関しても同様である。とりわけ、広島県の江田島に勤務していた期間は、地理的に遠く離れていたため在京の人々と交流する

機会は限られていた。しかし、海軍大学校へ転任の後は東京にもどり、存分に旧交を温めることができたのである。

何といっても最も親密かつ長期にわたり交遊が続けられたのが、彼が退職後に設立された沼津兵学校資業生出身者の親睦会である四両会である。同様の会には明治ヒトケタ代から続いていた沼津旧友会があったが、荒川も回想録の中に記しているように、同会には沼津兵学校出身者以外の人物が混ざるようになり、「不快」感を抱いた本来の会員らの反発もあり、やがて廃会となった。四両会は、いわば沼津旧友会を復活する形で誕生したわけである。荒川回想録で、正式名称が決定する前には、「純沼津会」「沼津小旧友会」などとして出てくるのはそのためである。判明している限り、明治四一年（一九〇八）から昭和二年（一九二七）まで、各自の自宅を持ち回りの会場に親睦会が続けられた。荒川はその設立発起人であり、最後まで出席を続けた熱心かつ健康な長命者であった。

表は、荒川回想録に記載されている四両会の開催記録をまとめたものである。毎回の例会についてすべて記載したわけではないようだが、毎回一〇人前後の会員が出席していたことが、その顔ぶれとともに判明する。会の内容に関しては、翻刻のほうを見ていただきたいが、主として将棋・囲碁の後の酒宴であり、当然ながら若き日の思い出を語りながらの楽しい会であった。時には旅行に出掛けることもあった。

四両会については、『同方会誌』第四四号（一九一七年、復刻版・第七巻）に掲載された石橋絢彦「沼津兵学校沿革（七）」において、明治四〇年九月一六日矢吹秀一邸に荒川・永峰が会合し設立を発起したこと、翌年一月二六日荒川宅にて初回を催したこと、特待会員四名（江原素六・乙骨太郎乙・中根淑・山田昌邦）、普通会員一四名（佐々木慎思郎・永峰秀樹・荒川重平・矢吹秀一・真野肇・三田佶・瀬名義利・野沢房迪・岡敬孝・伊藤直温・石橋絢彦・成瀬隆蔵・宮川保全・中村正寿）が会員だったこと、大正五年（一九一六）五月までに三五回の例会を開催したこと、会名は資業生が毎月四両の学俸を支給されていた事実に由来することなどが説明されていた。荒川回想録は、命名が明治四一年一月二六日だったことや、毎回の会の具体的内容のほか、その後会員が減少しながらも持続されていく末期の状況などを、さらに細かく明らかにしてくれたといえる。メンバーについても、「沿革（七）」に名前が載った以外の人物もおり、順次新会員が加わったことがわかる。一時的なゲスト参加者も含めれば、最大で二一名ほどの旧沼津兵学校教授・生徒が四両会に集っている。

四両会は荒川にとって、「何ノ遠慮モナク放談」できる、最も気の置けない身内同前の仲間であったといえる。

旧幕臣以外との付き合いとしては、とりわけ彼の場合、海軍ということで旧薩摩藩系の人々との関係も深かった。四一年（一九〇八）四月からは自宅を寄宿舎とし、鹿児島県出身学生を受け入れ、海軍兵学校の受験を指導した。また、それ以前から、島津忠重（公爵・のち海軍少将）の受験教育を担当したり（明治三六年八月、翌年九月合格）、東郷平八郎の次男の受験指導を依頼されるなど（四〇年一一月）、同県人との関わりは深まっていた。そもそも荒川には、明治十年代という早い時期に、やはり海軍兵学校に入った大久保利通の息子達熊の面倒をみたという経験もあった。加藤定吉が旧幕臣出身者としては初めて海軍大将に昇った際、「少ク溜飲ヲ下グ」と記したごとく（大正七年一一月）、薩摩閥に対する対抗意識は決して皆無ではなかったが、日常的な交流の中では鹿児島県人への仇敵視などはいち早く薄らいでいたであろう。島津家の園遊会に招かれた際には、「我ガ徳川公ニモ斯ノ如キ情緒濃厚ノ会合アリタシ」と感想を記しており（明治四〇年五月五日）、徳川家と旧幕臣のそれと比較し薩摩の君臣関係を好ましく思ってもいた。実際、静岡育英会の寄宿舎建設にあたっては、鹿児島の造士会の沿革・定款・報告書等を

## 荒川重平回想録にみる四両会

| 回数 | 開催日 | 会主・幹事（会場） | 出席者 | 人数 |
|---|---|---|---|---|
| | 明治40年10月18日 | 矢吹秀一 | 乙骨太郎乙・中根淑・永峰秀樹・真野肇・荒川重平・矢吹秀一 | 6 |
| | 明治40年12月 7日 | 永峰秀樹 | 真野肇・矢吹秀一・三田佶・荒川重平・永峰秀樹 | 5 |
| | 明治41年 1月26日 | 荒川重平 | 乙骨太郎乙・佐々木慎思郎・永峰秀樹・矢吹秀一・石橋絢彦・野沢房迪・荒川重平 | 7 |
| | 明治41年 3月23日 | 三田佶 | 乙骨太郎乙・中根淑・永峰秀樹・真野肇・矢吹秀一・岡敬孝・野沢房迪・伊藤直温・中村正寿・宮川保全・荒川重平・三田佶 | 12 |
| | 明治41年 6月13日 | 佐々木慎思郎 | 中根淑・永峰秀樹・矢吹秀一・石橋絢彦・野沢房迪・宮川保全・伊藤直温・中村正寿・荒川重平・佐々木慎思郎 | 10 |
| | 明治41年 9月27日 | 宮川保全 | 永峰秀樹・中村正寿・真野肇・荒川重平・宮川保全(＋α？) | |
| | 明治41年11月23日 | 伊藤直温 | 永峰秀樹・三田佶・真野肇・石橋絢彦・中村正寿・宮川保全・荒川重平・伊藤直温 | 8 |
| | 明治42年 1月30日 | 真野肇 | 中根淑・永峰秀樹・矢吹秀一・佐々木慎思郎・宮川保全・中村正寿・伊藤直温・荒川重平・真野文二・真野肇 | 10 |
| | 明治42年 5月16日 | 山田昌邦 | 永峰秀樹・伊藤直温・中村正寿・荒川重平・山田昌邦 | 5 |
| | 明治42年11月 7日 | 野沢房迪 | 乙骨太郎乙・佐々木慎思郎・永峰秀樹・三田佶・荒川重平・野沢房迪 | 6 |
| | 明治43年 3月12日 | 石橋絢彦 | 永峰秀樹・伊藤直温・宮川保全・真野肇・荒川重平・石橋絢彦 | 6 |
| 第13回 | 明治43年 8月28日 | 荒川重平 | 江原素六・乙骨太郎乙・永峰秀樹・真野肇・伊藤直温・成瀬隆蔵・荒川重平 | 7 |
| | 明治43年11月19日 | 三田佶 | 永峰秀樹・野沢房迪・宮川保全・伊藤直温・石橋絢彦・成瀬隆蔵・中村正寿・荒川重平・三田佶 | 9 |
| | 明治44年 2月11日 | 佐々木慎思郎 | 乙骨太郎乙・山田昌邦・永峰秀樹・石橋絢彦・野沢房迪・伊藤直温・成瀬隆蔵・中村正寿・荒川重平・佐々木慎思郎 | 10 |
| | 明治44年 5月27日 | 宮川保全 | 荒川重平・宮川保全(＋α) | |
| | 明治45年11月24日 | 成瀬隆蔵 | 江原素六・乙骨太郎乙・真野肇・永峰秀樹・佐々木慎思郎・宮川保全・石橋絢彦・中村正寿・伊藤直温・荒川重平・成瀬隆蔵 | 11 |
| | 大正 2年10月20日 | 山田昌邦 | 佐々木慎思郎・永峰秀樹・真野肇・岡敬孝・宮川保全・伊藤直温・中村正寿・荒川重平・山田昌邦 | 9 |
| | 大正 3年 4月 6日 | 永峰秀樹 | 荒川重平・永峰秀樹(＋α) | |
| 第25回 | 大正 3年 9月27日 | 荒川重平 | 石橋絢彦・永峰秀樹・三田佶・佐々木慎思郎・宮川保全・伊藤直温・真野肇・中村正寿・成瀬隆蔵・岡敬孝・瀬名義利・江原素六・荒川重平 | 13 |
| | 大正 3年11月15日 | 三田佶 | (総出席) | |
| | 大正 4年 5月30日 | 宮川保全 | 江原素六・三田佶・荒川重平・宮川保全(＋α) | |
| | 大正 4年 8月 1日 | 伊藤直温(多摩川) | 永峰秀樹・岡敬孝・中村正寿・石橋絢彦・成瀬隆蔵・荒川重平・伊藤直温 | 7 |
| | 大正 5年 2月26日 | 真野肇 | 佐々木慎思郎・永峰秀樹・岡敬孝・伊藤直温・中村正寿・荒川重平・真野肇・(真野正雄) | 8 |
| | 大正 5年 5月28日 | 中村正寿 | 江原素六・乙骨太郎乙・石橋絢彦・瀬名義利・真野肇・岡敬孝・宮川保全・伊藤直温・中村正寿・荒川重平 | 10 |
| | 大正 5年11月23日 | 成瀬隆蔵 | 荒川重平・成瀬隆蔵(＋α) | |
| | 大正 6年 4月16日 | 岡敬孝(梅川亭) | 真野肇・永峰秀樹・三田佶・伊藤直温・中村正寿・石橋絢彦・荒川重平・岡敬孝 | 8 |
| | 大正 6年 5月10日 | 瀬名義利(遊就館) | 乙骨太郎乙・岡敬孝・真野肇・永峰秀樹・三田佶・宮川保全・成瀬隆蔵・伊藤直温・中村正寿・荒川重平・瀬名義利 | 11 |
| | 大正 6年 9月23日 | 永峰秀樹 | 荒川重平・永峰秀樹(＋α) | |
| | 大正 6年 7月22日 | 石橋絢彦(常盤花壇) | 江原素六・乙骨太郎乙・真野肇・永峰秀樹・三田佶・伊藤直温・岡敬孝・成瀬隆蔵・瀬名義利・宮川保全・荒川重平・石橋絢彦・(永井久太郎) | 13 |
| | 大正 6年11月24日 | 荒川重平 | 永峰秀樹・宮川保全・岡敬孝・伊藤直温・三田佶・成瀬隆蔵・荒川重平 | 7 |
| | 大正 7年 1月27日 | 三田佶 | 荒川重平・三田佶(＋α) | |
| | 大正 7年 3月24日 | 佐々木慎思郎 | 荒川重平・宮川保全・瀬名義利・佐々木慎思郎(＋α) | |
| 第41回 | 大正 7年 9月29日 | 成瀬隆蔵 | 荒川重平・成瀬隆蔵(＋α) | |
| | 大正 8年 5月25日 | 岡敬孝 | 荒川重平・岡敬孝(＋α) | |
| | 大正9年1月24～26日 | 荒川重平(伊豆長岡) | 宮川保全・伊藤直温・永峰秀樹・佐々木慎思郎・三田佶・荒川重平 | 6 |
| | 大正 9年 3月28日 | 三田佶(鎌倉) | 佐々木慎思郎・宮川保全・瀬名義利・岡敬孝・新家孝正・成沢知行・荒川重平・三田佶・(愛知信元) | 9 |
| | 大正 9年 5月23日 | 佐々木慎思郎(銀行倶楽部) | 荒川重平・佐々木慎思郎(＋α) | |
| | 大正10年 1月23日 | 成瀬隆蔵 | 三田佶・宮川保全・永峰秀樹・瀬名義利・新家孝正・成沢知行・荒川重平・成瀬隆蔵 | 8 |
| | 大正10年 3月27日 | 伊藤直温 | 荒川重平・伊藤直温(+4人) | 6 |
| 第56回 | 大正10年11月27日 | 新家孝正 | 永峰秀樹・岡敬孝・三田佶・宮川保全・伊藤直温・成瀬隆蔵・成沢知行・江原素六・荒川重平・新家孝正・(神保小虎) | 11 |
| | 大正11年 3月26日 | 永峰秀樹 | 成瀬隆蔵・成沢知行・岡敬孝・三田佶・伊藤直温・荒川重平・永峰秀樹 | 7 |
| 第59回 | 大正11年 5月28日 | 荒川重平(王子扇屋) | 石橋絢彦・永峰秀樹・三田佶・佐々木慎思郎・伊藤直温・岡敬孝・新家孝正・成沢知行・荒川重平 | 9 |
| | 大正11年 9月24日 | 三田佶 | 荒川重平・三田佶(＋α) | |
| | 大正12年 3月25日 | 伊藤直温 | 成瀬隆蔵・荒川重平・伊藤直温 | 3 |
| 第64回 | 大正12年 5月27日 | 成瀬隆蔵 | 荒川重平・成瀬隆蔵・(愛知信元)(+4人) | 7 |
| | 大正12年11月25日 | 岡敬孝 | 永峰秀樹・伊藤直温・成瀬隆蔵・荒川重平・岡敬孝 | 5 |
| | 大正13年 3月23日 | 永峰秀樹 | 荒川重平・永峰秀樹(＋α) | |
| | 大正13年 5月25日 | 水野勝興 | 荒川重平・水野勝興(＋α) | |
| 第69回 | 大正13年 9月28日 | (栃内氏宅) | 永峰秀樹・伊藤直温・成瀬隆蔵・岡敬孝・水野勝興・荒川重平 | 6 |
| | 大正13年11月23日 | 石橋絢彦(葉山) | 伊藤直温・荒川重平・石橋絢彦 | 3 |
| | 大正14年 2月 8日 | 伊藤直温 | 岡敬孝・永峰秀樹・荒川重平・伊藤直温 | 4 |
| | 大正14年 3月22日 | 成瀬隆蔵 | 荒川重平・成瀬隆蔵・(愛知信元)(＋α) | |
| | 大正14年 5月24日 | 岡敬孝 | 成瀬隆蔵・伊藤直温・荒川重平・岡敬孝 | 4 |
| | 大正14年 9月27日 | 成沢知行 | 伊藤直温・成瀬隆蔵・荒川重平・成沢知行 | 4 |
| | 大正15年 3月28日 | 荒川重平 | 永峰秀樹・成沢知行・成瀬隆蔵・伊藤直温・荒川重平 | 5 |
| | 大正15年11月21日 | 成瀬隆蔵 | 荒川重平・成瀬隆蔵(＋α) | |
| | 昭和 2年 3月27日 | 永峰秀樹 | 伊藤直温・成沢知行・成瀬隆蔵・荒川重平・永峰秀樹 | 5 |

参考に供している（大正四年九月）。もちろん、彼は幕臣であるよりも教師としての履歴のほうが長いわけで、奨学舎（のち造士舎）で鹿児島の若い学生たちを教えることは、第二の人生におけるやりがいになったはずである。

四四年（一九一一）からは伏見宮博義王の海軍兵学校入学のための指導にもあたり、皇族とのつながりも生まれていた。長い人生の末、彼は自らの出自のみにこだわる狭い枠にはとらわれない広範な人間関係を築いていたのである。

なお、特記すべき事柄として、日本最初の開業女医である荻野吟子（一八五一～一九一三）との関係があげられる。荒川夫人八重子と荻野は、松本万年・荻江が東京九段に開いた漢学塾止敬塾で共に学んだ仲であった。荻野自身も八重子のことを「親友」であり、「予を落魂の淵に救」ってくれた恩人であるとしている（「近代最初の女医が経歴」『女学雑誌』第三五四号、明治二六年九月）。荒川回想録には、八重子と荻野がともに医学を志した同窓であり、明治一五年（一八八二）京橋区元数寄町の煉瓦家屋に住んだ際、二階を荻野に貸したこと、一七年（一八八四）築地の借家に引っ越した後も荻野を同居させたこと（以上本誌第一三六集）、一三年（一八九〇）年下のクリスチャンと結婚し熊本に転居した荻野に対し、医業を二の次にした行為に親戚・知人らとともに荒川も反対したこと、大正二年（一九一三）六月荻野の死去にあたってのコメントなどが記されており、彼女の生涯を長く見守っていたことがわかる。八重子は、吟子といっしょに医学修業に励んだこともあったが、実家阿部家の反対により断念したという（奈良原春作『荻野吟子―日本の女医第一号―』、一九八四年、国書刊行会、一〇七頁）。ちなみに、荻野を主人公にした小説、渡辺淳一著『花埋み』では、荒川重平の名が三か所ほど登場するが、単に家庭教師のアルバイト先、経済的な支援者としてしか記されておらず、八重子が吟子の親友として大きな存在だったことは描かれていない。荒川回想録は、荻野吟子伝に対しても貢献するものといえよう。史料的価値を示す一例に過ぎないが、あえて書き添えておきたい。

昭和二年（一九二七）一一月三日は勅令により明治天皇誕生日が明治節とされた第一回だったが、七七歳の荒川は、「余ハ幕末ニ生レ戦乱紛擾ヲ経、明治ノ大発展、二大戦捷、世界大戦ヲ過ギ科学ノ進歩諸発明、航空、ラヂオ等ノ驚嘆スベキ事物ヲ目撃、体験シ、本年喜寿ノ齢ニ達シ実ニ幸福ノ身、難有キ極ミナリ」と記した。日本の近代史とともに歩んだ自らの人生を振り返り、幸福な一生だったと結論づけたのである。確かに、敗戦という日本近代史の破滅的な結末を知らずに逝った彼は幸せだったといえよう。

荒川は昭和八年（一九三三）五月三日、すなわち死の七か月前までこの回想録を記していた。自らの手で自らの生涯をほぼ完全に書き綴ることに成功したといえる。

最後に、史料の翻刻・紹介をお許し下さった所蔵者である荒川鐵太郎様に対し心より感謝申し上げる次第である。

（国立歴史民俗博物館研究部歴史研究系）

（二〇〇六年九月二五日受理、二〇〇七年一月三一日審査終了）

〔凡例〕翻刻にあたっては、以下のような方法を採った。

1. 原文の有無に関わりなく、適宜句読点を付した。
2. 原文には改行がほとんどないため、翻刻でもその通りにした。
3. 原本には本文中や欄外に、朱書きや記号で印を付け、注や加筆・訂正がほどこされている場合があるが、翻刻にあたっては本文の当該箇所にそのまま続けたり、訂正後の部分のみを載せた。しかし、一部、必要と判断したもののみ、「　」内に入れ、訂正・加筆であることを明示した。
4. 明らかな誤字等についても、訂正せずそのまま翻刻した。
5. 割注が多用されているが、翻刻にあたっては本文と同じポイントとし、—と—の間に示すこととした。
6. 原史料は切れ目なく書き続けられているため、目印として原史料のページ数を付した。
7. 抜粋であるため、途中の省略箇所については、（中略）と表示した。また、原文の年月日部分を翻刻しなかった場合は、（　）内に算用数字で表示した。

【史料翻刻】

第一冊

95頁〔昨十八年静岡育英会設立ス、同会ハ旧幕臣子弟ノ学資ニ乏ク有望ナル者ヲ補助スルヲ目的トス、甫メ予等海軍々人旧幕出身者ノ後継者乏キヲ患ヘ其補充ヲ豊カセンコトヲ欲シ奔走シ賛成者モ多ク遂ニ赤松則良将軍ヲ推シテ会長トス、海陸軍々人ヲ主トシテ其他ニ及ボス、後榎本武揚中将ヲ会長ニ赤松氏ヲ副会長ニ推ス、予等幹事タリ、会ノ発展拡張ヲ計画スルコト屢々ナレドモ旧幕人ハ漸次故老モ減ジ情宜モ薄ラギ誰彼ハ旧幕人ト云フコトモ不分明ニ至ル、後ニハ自身ノ旧出身モ知ラザルニ至ランコト明白ナリ、此侭ニ放置セバ自然消滅ハ当然ノコト、故ニ予ハ静岡県人ノ子弟并ニ旧幕人云々ニ改メ永ク此会ヲ保存シ有力ノ者タラシメンコトヲ主張ス、大正六年大会ノ時其議ヲ呈出ス、時運ノ然ラシムル所、異議ナク議決ス、此時会長ハ平山成信氏ナリ、同君ノ尽力其効ヲ奏シ徳川家達公ヲ総裁ニ仰キ静岡県知事ヲ顧問トシ其他有力ナル県人旧幕人ヲ理事評議員等トシ、県ヨリ補助金ヲ受ケ東京ニ寄宿舎明徳寮ヲ新設シ、子弟ヲ寄宿セシメ学監ヲ置ク、貸費生モ数十人トナル、基金募集ニ勤メツツアリ、予ガ望モ果シタリ、今ヤ財団法人静岡育英会ト称ス〕

97頁（明治19年12月）同十八日ニ沼津旧友会ヲ向島八百松ニ催ストノ招状来ル—会費一円、此以前ハ五十銭ナリ—同会ハ永峰中川氏等ト発起者トナリ数年前ヨリ旧情ヲ温ムル為メ之ヲ開ク、初会ヲ向島八百松ニ催ス、其女将某ハ有名ナル老婆ナリ、予等ノ依頼ヲ快諾シ五十銭ニテ引受ケ其上、酌妓数人ヲ馳走ニ出ス侠気アル婦人ナリ、此会モ永ク継キシガ後ニハ沼津学校ニ縁故モナキ人ヲモ入レ変遷シ来リ面白カラザル有様トナリタレバ予ハ出席セズ其内廃止自然消滅ス

100頁（明治20年1月16日）兄上が橋本雅邦先生に入門シ度キ由ニ付、予之レが紹介ヲナス、月謝の額ヲ林雅昭君に問合せしに毎月五十銭ニテ可ナリト云フ、橋本君は兵学校改革迄ハ同校予科生徒画学教員たりしガ其

教材ノ画様ニ対シ次長ガ彼レ是レ批評シタルニ奮慨シ素人ガ濫リニ批評スルナドトハ怪シカラントテ辞職ス、之ヲ留メ慰撫スレドモ聞カズ遂ニ去レリ、其意気真ニ尊ムベシ、後ボアソナード氏ノ知ルトコロトナリ、画界ノ明星トナラレタリ、氏ハ平生寡言温厚、或時中牟田倉之助氏ガ兵学校長ヨリ転任、ヴィンナ博覧会ニ赴任ノ送別会ヲ芳町ノ百尺楼ニ開キシトキ橋本氏ガ同僚ト囲棋シ、傍人傍評セルヲ怒リ棋奩ヲ投ゲ盤面ヲ乱シテ去ル、其素質常人ニ異リタリ。林雅昭氏ハ雅邦氏ト同窓ノ友人、永ク兵学校ニ出務シタリ（中略）（2月）五日ニ数学物理学会ノ通知アリ、明治十年頃日本ノ数学者連ノ発起ニテ数学会社ヲ組織、和洋数学者ヲ網羅ス、神田孝平、柳栖悦、菊地大麓、川北朝隣―和算―、遠藤利貞―和算―、某―盲目ノ和算家―、等数十人、中川将行氏ト予モ席末ニ列ス、数学訳語会ヲ起シテ其一定ヲ計リ中川氏等草案委員タリ、又初メヨリ雑誌ヲ発行ス、予等編集ヲ司ル、後物理学ヲモ合併シ現今―昭和二年―ニ至ル、今ヤ数学物理学会ノ有名ナル雑誌発行シツヽアリ

116頁（10月）廿九日沼津会ニ出席―旧沼津兵学校ノ出身者ノ会―、十一月五日赤松則良中将先生ヨリ御知ラセニテ徳川―田安殿ノ小石川邸内―侯ノ流鏑馬競射ヲ拝観ス

117頁（12月）同十七日神田明神社地内開化学楼ニ陸海軍文官教員親睦会開催アリ、神保先生予等万事斡旋ス、士官学校二十四人、大学校十人、海軍兵学校十一人、同主計学校四人ノ中チ出席何人ナリシカ不明、陸軍ノ方ニ神保先生、田付直男、榎本祐三君ハ沼津出身、主計学校ニハ阪谷芳郎―当時正七位―君アリ―会費一円―。

118頁（明治21年3月）三十日兵学校生徒飛鳥山ニ徒歩競争挙行、各自随意ノ道ヲ採ル、予モ同行ス、午前六時十分出宅、八時飛鳥山ニ着ス、生徒ノ中加藤寛治氏―昭和ノ今ハ海軍大将、艦隊司令長官トシテ名将軍―等ハ五十五分、平均シテ一時十分程ナリ、此日財部彪氏―今ハ前ノ海軍大臣、海軍大将―ハ激動ノ為メ到着シテ卒倒ス、当時已ニ徒歩競争ヲ行ヒタリ、意気盛ンナリシナリ（中略）（4月14日）此日沢太郎左衛門氏―榎本武揚氏等ト和蘭国留学海軍伝習生ノ一人、箱館ニ脱走、同地ノ奉行トナリ後帰順、海軍兵学校出仕、予等厚遇ヲ蒙リシ人、温厚篤実ノ士ナリ―ヲ八百善―江戸時代ヨリノ名割烹店、浅草山谷ニアリ―ニ招待シ聊カ謝意ノ微衷ヲ表ス、列席者ハ長田清蔵、永峯秀樹、中川将行、白藤道恕、小花万次、真野肇、松波直清、吉田直温、平岡道生、笠原方正及予ナリ

122頁（7月）同十四日両国亀清楼ニテ送別会アリ、乙骨太郎乙、中根淑、山田昌邦三先生、田口卯吉、佐々木慎思朗、中川将行、真野肇、片山平三郎、諸君ハ留、山本淑儀、長田清蔵、永峯秀樹、平岡道生君ト予ハ送ノ方ナリ、皆沼津出身―長田君ノ外―者也、

128頁（8月18日）宇品出帆、江田島本村ニ着ス、兵学校裏門外ナル富豪久枝与三吉方ニ宿ス、十九日次長三浦功大佐―幕臣ニテ海軍ノ航海三傑ノ一人ト称ス、他ハ尾形維善、新井有貫ナリ、皆中将ニ進マル―等ト校用江田島丸小汽船ニテ宮島ニ遊ブ、

131頁（9月）廿一日中根淑先生―沼津在学当時ハ左伝ノ講義、天文指導法ヲ授ケラル、詩文、和歌、絵画ニ長ゼラレ、剛直、崇高、識高ク、予推服、尊敬ス―ヨリ来信、詩ヲ賜フ、曰ク、

第二冊

136頁（明治21年12月1日）午后、三浦功―次長、大佐―、山本―少佐―、長田、浦野、山本直徳、岩本耕作、鈴木四教、井上保、小花、平岡、桜井当道氏等ト共ニ静東会ニ広島ノ今中亭ニ会合ス、旧幕人ノ会ナリ、

145頁（明治22年4月）廿七日小蒸気船ニテ広島ノ春和園今中亭ニ赴ク、旧幕臣ノ静東会員ノ宴会ニシテ三浦功君ノ送別ヲ兼ヌ、

148頁（8月）二日館徳氏ニ溝口炊夢、たん、善補三人ノ墓石戒名ノ揮毫ヲ依頼ス―溝口家ハ兄死亡、嫂ウメ家ヲ継ギシガ後入夫セシヨシ、貞淑

ナラズ、今ハ音信消息絶エ、溝口家ノ寺、麻布立行寺ハ有名ナル大久保彦左衛門、一心太助ノ墓アリ、溝口家代々ノ大墓ナドアリ、予等重豊、重平、重秀三人協力シテ墓ヲ建ツ、僅カニ香花ヲ絶ヤサズ

154頁（23年1月7日）加藤定吉氏ハ青島攻撃軍ノ司令長官、男爵ヲ授ケラル、旧幕人唯一ノ大将ナリ、其写真ヲ山下源太郎ヲ介シテ贈ラル、

158頁（4月）十三日静岡県生徒―幕臣ノ子弟―十八名ヲ招キ留送別会ヲ開キ行ヲ盛ンニス

166頁（12月15日）乙骨太郎乙先生来訪、令娘まき子ノ加藤定吉氏トノ縁談ニ付相談セラル、（中略）十九日荻野吟子ヲ訪フ、熊本県山鹿町ニ移ル、下谷黒門町ナル荻野氏宅ヲ譲受ケタル麻生覚斎氏ノ談ニ荻野氏ハ耶蘇教伝道師志方之善氏ニ嫁ス、友人親戚等ノ意見ニ反シ、多病後年ノ目途ヲ按シテ決心セルナリト、予等モ反対ナリ、吟子女史ハ目的ヲ転倒シテ第一ニ耶蘇教ヲ伝道シ第二ニ女医ヲナスト云フ、残念ノ事ナリシナリ、昭和ノ今日ニ至リテハ女医ノ盛ナル、吟子女史ヲシテ知セシメバ定メシ満足セラルベシ、昭和二年十二月二十七日発行ノ日本女医会雑誌第三十号ニ同女史ノ逸事掲載セラレタリ、地下ノ女史瞑目スベキナリ、予ハ同女史ノ為メ世ニ新聞ニ投書セシコトアリ、吉岡弥生女医等ノ少ク冷淡ナルニ不快ナリシガ此記事ニテ溜飲ヲ下ゲタリ、廿日衆議院ニ至リ江原素六君ニ面会シ院内ノ模様ヲ看、廿六日ノ傍聴券ヲ乞ヒ受ク、

169頁（23年12月22日）富士見楼ノ育英会役員等ノ忘年親睦会ニ出席ス、蓋シ赤松中将及予出京セシ為メ特ニ此会ヲ催サレ役員外ノ人モ来会アリ、会長榎本武揚、黒田久孝少将、外山正一、沢太郎左衛門、其他多シ、

170頁（24年1月3日）新橋発、此日極穏、甚寒、箱根山中ノ景、富岳ノ白雪、駿海ノ烟波、沼津旧居ノ追懐、共ニ心ヲ慰サム、此マデ往来ノ時、曇天又ハ風雨ニテ富岳全形ヲ眺メシコトナシ、今日之ヲ望ム、維新前駕籠ニ乗リ藤助―江戸下谷山伏町ノ八百屋ナリ、道中ニ慣レタル者ユヘ仲間即僕トシテ従フ―ヲ従ヘ幕府ノ歩兵差図役並勤方ニテ（方今ノ少尉乎）ノ役ヲ帯ビ年十六、富士山ヲ眺メツ、通行ノ時、又明治元年乃至四年沼津城内ニ在住、富岳ニ近クアリシ時ナドヲ追懐シテ感慨多シ、今ハ已ニ三十九歳トナリヌ、浜松ニ宿泊ス、四日大坂着

171頁（24年1月）七日大坂砲兵工廠ニ至リ森川重申大尉殿ノ案内ニテ充分ニ見学ス、森川氏ハ予ガ沼津兵学校在学ノ時、体操銃隊教練等ノ教官ニシテ御世話ニナリタリ、正直一点張ノ軍人ナリシ、

174頁（1月31日）水交学校創立ニ付五ヶ年賦十八円ヲ寄附ス、蓋シ此校ハ海軍兵学校生徒志願者ノ予備学校トシテ海軍大学校々員等其原案ヲ草シ、将官等賛成シテ遂ニ創立ニ決シタルナリ、少佐磯野健―数学者ニテ予等ト同好ノ人、水路部々員ナリ―、中川大技士等大ニ之ニ尽力ス、遂ニ設立ニ至ラズ。育英黌設立ス、校長ニハ長持明徳氏、教頭心得ニハ弟重秀、幹事ニハ真野肇、吉田義高、選定セラル、此校ハ育英会ヲ主脳トシタルルモノ、長持氏ハ砲兵佐官、沼津兵学校ニテハ予等ノ教師ナリシ人、真野氏ハ予ト同窓ノ旧友ナリ、此校モ永続セズ。

176頁（3月）六日新任次長尾形維善大佐着任ス、氏ハ旧幕府人、三船乗ノ一人ナリ。

180頁（24年4月）十一日石橋好一先生傭員辞職ニ付送別会ヲ広島菰橋春和園ニ開ク、会者沢大佐、長田、小玉判事、永峯、荒川、山本直徳、平岡、市川、小花、永嶺―大機関士―、笠原、桜井氏等ナリ、皆旧幕人、石橋氏ハ沼津兵学校ノ英語教官ニテ温厚篤実ノ方ナリシ、

182頁（24年5月）七日佐竹万三氏ノ兵学校出仕志望ノ旨ヲ長田氏ニ委頼ス、九日旧幕人ノ葵陽会ニ出席ス、広島、呉、江田島在勤ノ旧幕人ノ懇親ヲ厚フスル者、毎年四、十月ノ二回トシ、会費一円ナリ、此日広島菰橋ノ春和園ニ開催ス、山脇、中島ノ両陸軍少佐、設楽軍医、大角広文、寺田軍吏、田中書記、笹岡中尉、佐野中尉、手島書記、飯塚主税長、児玉利充氏ト海軍出仕ノ同人ニテ二十八九人、甚タ盛宴ナリ、（中略）廿九日餞別金二十五円ヲ桜井当道君ニ送ル、同氏ハ旧幕人、明治四、五年

頃兵学校属官拝命、精勤無比殆ド一日ノ欠勤ナシトイフ、実直此上ナク、本年六十五六才、今回官制変革ノ為メ非職トナル、

184頁（24年6月）十九日佐竹万三氏ハ判任三等兵学校出勤ヲ命ゼラル、予ノ周旋セシ所ナリ、氏ハ沼津以来ノ旧友ニテ英漢ヲ能クス、奇行ノ人、独旅行ヲ好ミ演劇ニスキ社交ヲ嫌フ、氏ノ子息ナル乎三五氏ハ大学出身、県知事、警視総監等ヲ経テ政友会有力者ノ一人、貴族院議員タリ

206頁（24年9月14日）弟重秀ハ静岡大務新聞紙ノ編輯ニ従事ス、

209頁（24年12月22日）江崎政忠氏ノ結婚披露式ニ牛込箪笥町吉熊料理店ニ招カル、新婦ハ乙骨太郎乙先生ノ長女まき子ナリ

214頁（25年1月）六日尾ノ道ヨリ共栄社ノ汽船関西丸ニテ出港ス（中略）母子二人ノ客アリ、談話ヲ交ユ、其男曰ク、君ハ荒川君ニアラズヤ、曰ク然リ、君ヲ誰トカスル、曰ク、白戸ナリ、予之ヲ熟視スレドモ覚エズ、彼曰ク然ラバ某学校ニ尽力セラルル荒川君ハ令弟ナルカ、曰ク然ラバ弟重秀ナラン、育英黌ニ従事セリ、彼曰ク先刻ヨリ君ノ容姿音声、重秀氏ニ酷似セリ云々、予曰ク白戸砂君ノ令息カ、曰ク然リ、白戸隆久トイフ工学士ニテ長崎造船所ノ技師ナリ、熊倉興作、市川俊雄、伊藤辰吉氏皆知友トイフ、白戸砂君ハ静岡藩ノ時知名ノ士ナリ、

215頁（25年1月30日）此日旧幕人、平岡氏ノ官舎ニ集会ス、呉市ヨリハ荒井有実大佐、天野才蔵少佐、永峯大尉、村垣大機関士等、広島ヨリ山脇少佐、佐野中尉、寺田軍吏等及ビ兵学校在勤ノ文武官数人ナリ、佐野運籌中尉後備ニ入リ帰郷セラルルニ依リ送別ノ為メナリ、佐野氏ハ旧幕府陸軍士官ニシテ沼津兵学校ノ体操教師タリシ旧知人ナリ、

217頁（2月）十五日沼津兵学校ノ同窓旧友陸軍士官渡辺当二氏来訪、砲台位置巡視ノ序ナリ、

221頁（7月26日）旧幕人生徒木村金弥、中島資明、平塚保、河井義次郎、原胤雄五氏卒業シテ候補生トナル、来礼、赤飯、之ヲ祝ス、

第三冊

242頁（26年8月）十五日衆議院議員江原素六氏呉鎮守府砲台等巡視ノ帰途来訪、前ニモ記セルガ如キ恩人ナリ、之ヲ小用村ニ送ル

249頁（12月）十三日麻布鳥居坂ナル東洋英和学校ニ江原素六君又本山漸君ヲ訪フ、現今ノ麻布中学校ノ前身ナリ、

252頁（12月20日）安藤、佐竹両属ハ非職、之ヲ電報ニテ諸氏ニ知ラス。

256頁（27年1月）二日重秀ト同行東京出立、沼津着、中村六三郎氏ヲ城内町ノ居宅ニ訪ヒ宿泊ス、旧友小川友益、旧名助太郎氏ニ逢フ、氏ハ予ガ十六才ノ時京都ニ戍役セシトキ歩兵差図役並勤方、同役同隊ニテ殊ニ兄弟ノ如ク親睦シ、千本通リノ某寺ニ同宿シ、二条城内ノ舎宅ニテモ同棲シ、共ニ江原素六当時鋳三郎氏ノ中隊ニ在リ。主人、小川氏ト共ニ囲碁ヲ打チ閑遊、実ニ楽シカリシ、中村氏ハ商船学校創立ニ力ヲ尽クシ同校々長タリシ人、其長女フシ子ハ妻ヤヘノ旧友ナリ、築地ノ予住家ハ元ト中村氏ヨリ譲リ受ケタル者ナリシ、三日同家ヲ辞謝シ沼津市大門町正見寺ヲ尋ネ溝口亀兄ノ亡妻常子ノ墓ニ詣ヅ、回向読経。過古帳ニ善明院妙道日修、溝口衛亡妻俗名ツネ子明治三年九月廿五日トアリ、嫂ハ不幸病没、二女モ夭折ス、幕臣遠山何守ノ娘ニシテ溝口大伯父ニ養ハレ、亡兄ニ嫁ス、旧幕時代ニハ大家屋ニ住ヒ用人下女下男ヲ召シ使ヒ何不自由ナク栄華ニ暮ラセシガ一朝幕府瓦解ノ後チハ平家ノ都落チニモ比スベク幸ヒニ兄上モ陸軍士官ニテ沼津ヘ移住、旧乳母ヲ伴ヒ、予モ同居、志下村ノ名主某方ノ八畳ノ一室ニ一家族ト共ニ起キ臥シシ、苦シナガラモ朝夕ノ烟リモ立テ、在リシガ幾何モナク我入道村ノ牛伏山下ノ寺ニ移リ又市内ノ商家ノ二階ニ僑居セラレ、其家ニテ病没セラレ、兄上モ遂ニ兵学校生徒ヲ辞サレ、遺子達女ヲ伴ヒ出京シテ之ヲ母上ニ托シテ京浜間ニ英文修行セラレタリ、予ハ乙骨太郎乙先生塾ニ入リ——余ハ明治初年ノ此伝中ニ記セリ。ヨキ序ナレバ間宮信行先生、佐野運籌氏、万年千秋先生ヲ訪ヒ、中村氏ニ戻リシニ昨夜、息松太郎ノ夫人男子ヲ挙ゲラル、

262頁（4月3日）平岡道生氏ハ錦城学校講師、月謝二十円トイフ、
264頁（4月）十五日従道小学校生徒運動会ヲ宮島ニ挙行、（中略）此日知港事三浦功大佐小蒸気船ニテ来リ居ラル、（中略）同大佐ハ江戸児肌ノ快男子、キビ々シタル人、後中将ニテ逝去セラル、十七日小花作介氏来訪ス、氏ハ三田葆光君外一人ト共ニ諸国漫遊ノ途次、令息万次氏方ヘ来宿、三田氏ハ吾旧友佶氏ノ父上ニシテ歌人也、
265頁（5月8日）中村六三郎氏ニ信書ス、沼津兵学校紀念碑費金ノ増額ニハ不賛成ナリ、既納ノ分ニテ謝ス、
269頁（8月22日）小柳津要人氏親戚金沢分吉氏来訪、小柳津氏ハ岡崎人、箱館戦争ニ加リ佐幕、沼津ニテ乙骨先生ノ同塾、後丸善書店ニ入リ番頭トナリ現今ニ至ラシメタルハ殆ンド氏ノ功績ナリ、慎直、剛毅、尊敬スベキ人物ナリ、
271頁（8月28日）松島艦長ハ向山慎吉氏、旧幕臣ノ傑物詩人向山黄村君ノ子、中将ニテ逝去ス、又西京丸機関長ハ亦幕人山本安次郎大監、予ト特ニ親シ、其談ニ曰ク、樺山軍令部長ハ同船甲板上ニ悠然ト歩行、
272頁（8月）廿九日育英会ヨリ信書アリ、旧育英黌ノ一学科ハ東京農学校ト改称ス、後ニ独立ノ立派ナル農科大学トシテ麻布ノ南辺ニアリ、此一科ヲ自今本会ノ所属トスベキヤ否ノ意見ヲ問ハル、予ハ答フ、元来本会ノ主旨ニ照シテ旧育英黌設立ニモ不賛成ナレバ右農学校ト全ク関係ヲ絶ツコト、至当ナリ云々ト、榎本武揚会長ハ此校設立ニ尽力セラレタリトカ、
273頁（9月23日）校長広島ニ出張、江田島丸ニ便乗シテ江原素六君ヲ訪フ、臨時議会ハ昨日閉会ノ由、（中略）島田三郎氏ヲ訪フ不在、田口卯吉氏ヲ訪フ、宮島行トテ逢ハズ、
283頁（明治29年7月25日）育英会ニ出席、会長赤松男、福田、小林一知、天野可春、早川省義、中川将行、平岡道生、真野肇、山本淑儀君ニ逢フ、（中略）廿七日内山正寿氏ヲ訪フ、氏ノ養父孝之助先生ハ幕府ノ儒者、予ガ漢学ノ師、予ガ十四才ヨリ一年間同氏ノ塾ニ入リ四書五経ノ素読ヲ習ヒ昌平黌素読四書五経吟味ニ出場シ甲科及第丹後縞三反ヲ拝領ス、同塾内ニ起居ヲ同フセシ友人ハ三佶佶（後日本銀行重役）、桜井?之助、木村正太郎、山下某?及予ノ五人、外来ニハ目賀田種太郎男爵等皆同時受験連ナリ、此縁故ノ為メ同家ヲ尋ネシニ不在、
289頁（9月）三日広島ニ行キ岡敬孝氏ヲ訪ヒ、素謡三番同吟、同氏養子喜七郎氏ハ広島県ノ警部長?ニシテ政友会ニ入リ警視総監、昭和三年ノ方今ハ貴族院議員ニシテ同党ノ一人物タリ、
295頁（29年12月31日）京都駅ヨリ石原勇五郎氏ト偶然同車、氏ハ森岡人?沼津ニ来学以来ノ知人、退役海軍大主計、和泉ノ谷川船渠新設発起者主唱者ナリト、
297頁（30年1月）五日西周先生易簀セラル、師ハ沼津兵学校一等教授校長タリ、陸軍ニ出仕、功ニヨリ男爵ヲ授ラル、（中略）六日中川将行氏病死ノ電報、流行症ノモノトイフ、予ハ中川、永峯、矢吹秀一、吉田一郎四氏ト明治四年海軍出身志願ニテ沼津兵学校ヲ辞シ、予等三人ハ兵学校ニ出仕シ、矢吹氏ハ陸軍ニ入リ工兵大佐ニテ日清戦役ノ功ニヨリ男爵、後中将ニテ薨ズ、吉田氏ハ逓信省カニ出仕早ク肺患ニテ死ス、中川氏剛直、胆力アリ、数学ニ長ズ、予ト共ニ数学物理学会—方今ノ名ニシテ有名ノ会ナリ—ノ前身ナル数学会ノ創立ヨリ入会シ、編集、訳語会創設等ニ尽力セリ、英漢両学ニモ通ジ一箇ノ好漢、予之ニ兄事シタリ、唯直ニ失シタル嫌アリ、昭和三年ノ今日、五人ノ中チ予一人残存ス、旧友会ナル四両会員ハ石橋絢彦、成瀬隆蔵、成沢知行三氏ト予ノミ、（中略）三月二日山本淑儀氏ヨリ信書、故中川氏遺子養育ノ為メ資金千円許ヲ募ルニ付発起人タレトノ事、其人々ハ赤松則良、矢吹秀一、寺尾寿、真野肇、山本淑儀、永峯秀樹、吉田直温、早川省義、荒川重平等ナリ、育英会々員、静岡県ノ旧幕人、中川氏弟子タリシ人等ニ向ツテ捐金ヲ募ル、此事タル故中川氏ノ性行ニ対シ甚ダ面白カラズ、残念ナガラ山本君等ノ好意

ハ謝スルニ余リアレドモ、捐金募集ニヨラズシテ他ノ方法ニヨリ願ハクハ世間ニ公表セザルヲ欲ス、去レドモ予等ハ遠クニ在リテ如何トモスル能ハズ、

320頁（8月）十八日吹田鯛六氏死、沼津以来ノ旧友ナリ、

326頁（12月）十七日辞令アリ、荒川重平、海軍兵学校普通学教官被免、海軍大学校教官被仰付―十三日附―、予明治四年ヨリ二十六年間在職今年初メテ転職セリ。（中略）廿三日午前八時江田島出発、伴野秀堅君ト同行ス、松井、市岡両君広島マデ見送ラル、江田島ヲ去ルニ際シ、永キ馴染ノ第二故郷ヲ離ル何トモイヘヌ感傷ノ情、胸ニ溢レ後髪ヲ引カルルノ想ヲナス、予江戸ニ生レ、京都ニ一年、沼津ニ三年、江田島ニ九年ナリ、江田島ハ真ニ住ミ心地ヨキ処ニテ一校家族的ノ生活、友情ニ深ク妻子等今ニ至リテモ江田島ノ往時ヲ追懐スルナリ。

第四冊

334頁（30年12月25日）世外ノ一孤島ニ在リテ交際スル者ハ校員ノミ、煩累モナク、授業ノ余暇充分ニアリ、独修独学ハ思ノ侭ナレドモ只中央ノ学事ニハ自然疎クナリ、所謂ル村夫子的ニ傾ク患アリ、故ニ教授ノ交代ヲ主張シタルナリ、

337頁（31年1月）二日乙骨先生、山本淑儀君、石橋好一先生、中根淑先生、目賀田種太郎氏ヲ訪フ、久シ振リニテ帰東セル故、友人故旧ヲ訪問スルコト多シ、然レドモ先生又ハ重ナル人ノ外ハ記入セズ

339頁（3月）十一日真野氏宅ニ往キ故老母堂葬式ノ接待掛ヲ担当シ、葬式ニ列ス、帰途乙骨、中根、山本三先生ト小石川清水谷ナル深光寺ニ馬琴ノ墳墓ニ詣ヅ。（中略）廿日目賀田氏ノ招待ニ依リ旧聖堂会員今泉雄作氏ノ送別会ニ参列ス、平山成信、三田佶、塩谷宕陰先生令嗣、青山、大類某来会。

341頁（四月）二日育英会総会ニ今川小路玉川堂ニ出席、評議員半数改選ヲ会長ノ特選ニ附ストノ動議出ヅ、予ハ之レニ大反対ヲ唱フ、遂ニ従来通リト決ス

346頁（31年5月）七日沼津旧友会第三十六回ヲ向島枕橋ノ八百松楼ヲ開カル、予九年振リニテ出席ス、壮者モ多クハ頭ニ霜又ハ白髪ト変ジ若クハ故人トナリテ其遺子ニ面会スルナド旧知新知ニ会シ悲喜感慨殊ニ深シ、

347頁（5月）廿三日小花氏ト共ニ日本銀行ヲ参観ス、同行員旧友三田佶氏ノ案内ニテ隈ナク之ヲ看ル、

349頁（6月12日）南千住通新町ノ円通寺ニ参詣ス、戊辰己巳ノ年各地戦死者ノ大法会ナリ、予モ常野ノ野ニ脱走、官軍ト抗戦シタリ、旧友ノ死者ヲ弔ヒ懐旧情転功ナリ、当時予附属ノ大隊長加藤平内（方今恭壮）氏ニモ面会セリ、余興ニハ会員又ハ有志ノ謡曲及ビ講談、落語、高野念仏等ニテ盛会ヲ極ム、幇間桜川善孝？氏ハ旧幕士、ヨクモ身ヲ落シタルモノカナ

363頁（11月）同方会賛成員ニ推挙セラル、同会ハ旧幕臣及其子弟ノ会合、懇親ヲ主トシ且ツ旧事物等ノ考証ヲモ成シ以テ其雑誌ヲ発行シ又ハ遠足スルコトモアリ。

369頁（明治32年1月）廿一日山田昌邦先生ノ新築家屋落成祝ヒニ招カル、江原素六、熊谷直孝、画伯荒井芳宗三君同席、廿五日故勝安芳伯葬送式ニ青山墓地祭場ニ会ス、夜来大雪二人引キノ人車ニテ雪中寒気甚シ、

370頁（2月）廿六日石丸輝徳老ヲ訪フ、氏ハ旧幕歩兵差図役頭取、予ガ差図役並勤方タリシ時ノ上役ナリ、三十年前知遇ヲ受ク、方今ハ赤城明神社内ニ大弓射場ヲ営マル、昔シ懐カシケレバ尋問セリ、氏モ大ニ悦ビ懐旧談ニ時ヲ過シ、分袂ス、其後遂ニ会ハズ、（三月）五日上野東照宮社務所ニ旧幕人ノ葵会素謡会ニ出席シ、同方会ニモ出席ス、

370頁（4月）廿九日上野東照宮社務所ニ開催ノ同方会ニ初メテ出席ス、内陣ニ参拝シテ御神酒ヲ頂戴ス、卅日芒鞋掛ケ行厨ヲ携ヘ目賀田氏ト同

行故勝伯ノ百日祭ニ千束村洗足池畔ノ御松庵ナル故伯ノ別墅ニ至ル、親戚故旧皆行厨自携之ニ参列シ、一同墓前ニ拝ス、紀念トシテ故伯ノ印譜一冊恵贈、席上宮本小一氏ノ発議ニテ墓側ニ浄手石槽ヲ奉納スルコトニ決ス、此後数回祭日ニ参拝セリ、石槽ノ記名中ニ余ノ名在リ、余ノ名ノ石ニ刻メルモノハ立行寺ノ亡兄溝口善補ノ墓石ニアルモノト、此レノミ。

371頁（5月）廿七日沼津旧友会第三十八回ニ出席ス、

399頁（11月）五日目賀田氏ト同行、洗足村ノ故勝伯ノ墓ニ詣ヅ、富田鉄之助氏ノ幹事、祭典執行、故旧知己等ノ参会者ハ木村芥舟、杉浦梅潭、吉田市十郎、島田三郎、田口卯吉、津田真道、道家雅道、宮本小一、宮島誠一郎、富田鉄之助、浜武慎、奈良真志、津田仙、妻木頼黄、桜井貞、天野可春、巌本善治、其他、知ラザル者多シ、詩歌ノ手向ケアリ、本多晋氏歌ヲ代読、某氏ハ詩ヲ代吟、各自行厨ヲ開キ勝家ヨリハ茶飯ト豆腐汁ヲ供セラル、又婦人ニハ勝伯令息梶某、孫女、伯ノ令妹君佐久間象山未亡人等数名、秋高ク気澄ミ、好晴、来会者ハ幕人ノ名士及ビ故伯恩顧ノ人々ナリ。

402頁（12月26日）乙骨耐軒先生夫人ノ墓ニ詣ス、予沼津在学中、乙骨太郎乙先生ノ塾ニアリシ日、此老夫人ニ厚遇ヲ受ケタリ、夫人ハ淑徳、温良、自ラ畑ヲ作リ、其野菜、芋類ヲ食膳ニ上ボセ、余等塾生ハ喜ンデ飽食セリ

406頁（明治33年1月）廿四日田口卯吉氏腸チフスニ罹ル、之ヲ大学病院ニ見舞フ、重態、氏ハ予ト共ニ在沼津ノ折、乙骨太郎乙先生宅ニ寄宿シ、共ニ英書ヲ学ブ、予ヨリ若ク一風変リタル少年、事物研究ニ熱心、時々議論モセシガ彼ノ説常ニ可ナリ、

409頁（3月）廿一日目賀田氏宅晩餐会、旧聖堂連ノ例会、特ニ予ヲ招カル、会者ハ三田佶、今泉雄作、塩谷時敏、真野肇、寺崎遜ノ諸氏、今泉氏ハ現時鑑定家ノ大家、上野博物館ニ出仕ス、磊落洒脱ノ人、未ダ酔ハザルニ既ニ酔ヘルガ如ク面白シ、高野念仏踊リヲ巧ニス、ナンマイダ〳〵ト唱ヘ木魚ヲ叩ク態度ニテ足取リ妙ニ軽ク踊リ廻ルナリ。塩谷君ハ故宕蔭先生ノ息、謹直ノ儒且ツ酒豪、酔エバ詩吟高唱音吐朗々タリ、真野氏ト予ハ謡曲ヲ主人ト同吟ス、旧友新知隔意ナク雅気露出真ニ掬スベシ。

420頁（5月）十九日沼津旧友会第四十回向島八百松楼ニ開カル、幹事ハ大塚庸俊、角田真平、中川喜重、杉山正治、杉田義雄氏、余興ニ福引アリ、予ノ闘ハ「はごかで道中」其心ハ一往復はがき。并ニ沼津会ノ濫觴（心ハ）魁（歳名）即チ先ガ毛、此近頃沼津兵学校出身以外ノ者モ交入シ来リ、余等不快ヲ覚エ遂ニ欠席勝トナリ後遂ニ廃会。

第五冊

434頁（明治34年3月17日）三輪ノ円通寺ニ参詣ス。此円通寺ニハ彰義隊戦歿者ノ墓ヤ旧幕人知名ノ士ノ碑、例ヘバ榎本武揚氏等ノ如キアリ、箱館戦争当時ノ人士、侠客ヤ旧幕縁故ノ碑等建ツ。毎年五月彰義隊士ノ法要挙行、余興ニハ奉納ノ歌、音曲、謡曲、高野念仏、落語、講釈等ヲ催ス、素人、玄人相混ス。甚ダ賑ハシシ、予ハ数回参詣セリ。初メ円通寺ノ先住某和尚ハ上野戦争当時、東軍戦没士ノ屍体ガ風雨ニ曝露サレシ者ヲ収葬センコトヲ出願シ官許、乃チ数多ノ死骸ヲ寺内ニ埋葬供養セシナリ、後幕人有志ノ補助ニヨリテ漸ク祭典モ盛大ニ至リシナリ。

458頁（12月）十五日木村芥舟翁死、千駄ヶ谷瑞円寺ニ葬式参列ス、翁ハ旧幕府軍艦奉行、乗咸臨丸、以国使航米国、本邦軍艦航欧米之初也、勝海舟伯為之艦長、福沢諭吉先生為翁従僕云、特贈正五位。徳川従一位慶喜公ノ新築邸工事ヲ小石川第六天町ニ参観ス

465頁（明治35年4月21日）和歌ノ師橘道守先生易簀ス、近藤真琴氏一族、真野肇、同文二、中川将行、永峰秀樹、予等相集リテ歌会ヲ催シ、毎月其批評ヲ乞ヒ数年継続セシガ、

467頁（5月）十日女子職業学校ノ製作所陳列会ニ招待セラレ、内田ふく

子、のぶ女ヲ伴ヒ参観、同校ハ沼津兵学校同窓ノ友宮川保全氏ノ創設ニ係ハル、卒業者ガ初メテ三越店等ニ入リ、ソレヨリ漸ク盛況トナリ、女店員等各方面ニ活生計ヲ営ミ、国家ノ利益ヲ与フル多大ナリ、後宮川氏ハ藍綬褒章拝受セリ。十八日箕輪ナル円通寺ニ於テ旧幕臣各地戦死者法会ニ出席、余興トシテ桃川如燕、旧幕臣ナル伯鶴ノ講談。素人義太夫二組、空也念仏、撃剣等、参拝者数百人、榎本子爵等旧知友人多シ。

468頁（6月）五日旧主従一位徳川慶喜君特授公爵、予ハ歓喜ニ堪エズ、新村猛雄氏ヲ訪ヒ、祝詞ヲ公爵ニ言上セラレタシト委頼シ、更ニ公邸ニ参上、祝詞ヲ呈ス。佐々木慎思朗氏ヨリ島田随時氏ノ大患ヲ報ゼラル、直チニ見舞フ、肺及腸ノ疾患重態ナリ、昨年ハ末男文雄氏ヲ失ヒ其外種々ノ災厄、実ニ憐レナル状況ニ接シ落涙堰キアヘズ、先年中ハ隣家相交リ、永峰氏ト三人ハ囲棋ノミ好敵手、往来互ニ楽シミ、沼津以来ノ旧同窓ノ友、好人物ナリシガ、不幸ノ人ナリシ

480頁（11月）十九日育英会幹事会ヲ飯田河岸清涼館ニ開ク、早川省義、妻木頼黄、加藤定吉、山口勝、及余ノ五人

491頁（12月）旧君徳川慶喜公新叙爵祝賀会ヲ九段坂上陸軍偕行社ニ挙行ス、御一家ヲ招待申上グ、先ヅ庭上ニテ写真撮影ス、太々神楽、手品術、観世清廉同清之両氏ノ謡曲等ノ余興、楼上ニ立食ノ饗宴ヲ開ク、維新前公ノ恩苦辛苦忠申スモ賢シ、後ノ御謹慎惨状、嘸カシト御察シ申上グ、東西暦史ヲ按ズルニ覇者、帝王ノ末路、哀嘆傷スベキ者ノミ、独リ徳川氏ノミ此ノ如キ光栄ヲ荷ヒテ祖先ノ廟食ヲ完フセラレタルハ其祖義公其父君烈公ノ余徳トハ申乍ラ此公ノ精忠聰明ニ因ラズンバアラズ、且ツ本家家達公ノ徳望、朝野ニ普ク、公ノ継嗣慶久君ノ人格後来有望ノ青年公子トシテ定評アリ、余ガ如キ幕臣トシテハ歓喜勇躍、此レ然シナガラ在上　聖天子ノ偉大、恩徳トイフベキナリ。

483頁（36年2月）六日新村猛雄氏ノ周旋ニヨリ吹田順助氏ヲ新公爵家世子慶久君ノ学友トシテ世子ト同棲シ且ツ学費毎月十五円夏冬洋服一着靴一足ヲ恵給セラル、吹田ノ父鯛六ハ余ノ同窓友ニシテ乙骨太郎先生ノ義弟ナリ、十二日吹田順助氏ヲ伴ヒ徳川公邸ニ参リ慶喜公ニ拝謁ス、十五日目賀田氏ニ面会ス、勝精伯ヲ余ガ家ニ寄宿、監督ノ委頼アリシガ今回慶久世子ト同棲ノコトトナル

502頁（8月）九日島津忠重公ノ英、数学教授ノ為メ沼津在静浦保養館ニ赴ク、予明治二年亡兄溝口善補、嫂常子等ト移住ノ際仮寓セシ桃郷志下村海岸ノ林ノ内ニ保養館立テリ、村落ハ旧態存スレドモ海浜ハ牛伏山下ヨリ志下ノ隣村獅々浜ニ至リ大変化ヲ来シタリ、牛伏ニハ沼津別荘ノ創設者大山巌侯ヲ第一トシ、三島駅世古氏ノ三島館海水浴場ヲ第二トシ、川村純義伯別邸、沼津御用邸、某氏別荘、安藤氏ノ病院海浜院、保養館、西郷侯別邸、某氏別墅等、海岸ニ散点ス、三十二三年前ニ比シテ変化甚大ナレドモ依然旧観ヲ改メザルハ山川ノミ、旧知ノ鷲頭山、香貫山、江ノ浦等ノ旧游地ハ余ヲ迎フルモノ、如ク、懐旧無限ノ感ニ打タル、

502頁（8月14日）余ハ沼津ノ旧師旧友ヲ訪フ、中村六三郎、間宮信行先生、佐野運籌、矢吹秀一氏出京其夫人ニ、大門町正見寺ニ故溝口兄上ノ亡妻善明院ノ三十三回忌ノ法要ヲ行フ、帰途古川宣誉氏ノ新築宅ヲ香貫村ニ訪フ、十五日散歩ノ次、一老人ニ逢フ、問フ、志下村ノ「中ンヂヨウ」ハ如何ニセンゾト、彼曰ク彼家ハ「モウ死ニ絶エ、遠キ血筋ノモノガ継イテ居マス」ト、蓋シ「中ンヂヨウ」トハ沼津移住ノトキ初メニ兄上ト仮寓セシ此村ノ名主某ヲ指ス、又問フ「其裏隣ニ某氏ノ学者トイハレシ人ハ「ドウシタ」ト、彼曰ク、アレハ徳右衛門トイツタガ、トイハレ余ノ記憶ヲ呼ヒ起セリ。其人ノ孫ガ今ノ当主ナリト、此徳右衛門家ノ十畳許ノ一室ヲ借リ兄夫婦、娘、其乳母及余ノ五人同棲シ、此一室ハ居間、寝室、食堂ヲ兼ヌ、余ハ沼津城内ナル乙骨太郎乙先生ノ門ニ入リ、田口卯吉、堀田徳次郎、吉田丹蔵霽江、小柳津要人等ト同塾生タリ。兄モ余モ兵学校生徒ニテ資業生ト呼バル、兄ハ其後沼津町ノ商家ノ裏座敷ニ寓居、明治三年九月廿五日嫂常子ハ死亡セリ、又一老人ト一老女ノ沖

ヲ眺ムルニ逢フ、又「中ンジヨウ」ト徳右衛門ノコトヲ問フ、老人曰ク「中ンジヨウ」家ハ死ニ絶エテ、弟弥七ノ娘ガ他ニ嫁シテ生ミシ子ガ方今「中ンジヨウ」ノ後デス。曰ク「中ンヂヨウ」トハ綽名カ「サウデス」、五十嵐忠七デスト、余思ヒ起シタリ、徳右衛門ノ孫ハ徳太郎トイフ云々、又側ニ一女子ノ子ヲ抱キタル者ガ余等ノ問答ヲ珍ラシサウニ聞キ居リシガ、曰ク其家ハ観音堂ト「ポンプ」庫ノ間ヲ山ノ方ニ入リ左ノ曲リ角ノ右家ガ五十嵐家デ、ソレヨリ二軒目ノ黒塀ニテ庫ノアル家ガ徳太郎ノ家デスト。余ハ其家ヲ見ニ行キシガ分リタリ、徳右衛門ハ昨年死セリト云フ、今ハ知人ナシ、懐旧ノ情転タ切ナリ。十六日小牧氏ト牛伏山ニ散歩、氏ハ大山侯訪問、氏ノ紹介ニテ侯ニ謁ス、侯ハ肥大ノ体躯ニ白単衣、兵児帯、談話軽ク少シモ隔意ナシ、四方山ノ話ノ次ニ明治二十一年頃此牛伏山ノ地ヲ観、三島駅ノ旧家世古氏ニ勧メ共ニ開拓シテ侯ハ此南西ノ地ヲ相シ山ヲ切開、其土石ニテ東方海岸ヲ埋メ方今ノ三島館海水浴場ヲ作リ、之ヲ世古氏ノ有トシ、侯ハ三面牛伏山ヲ負フ山麓ニ新屋ヲ建テ松樹「夾竹桃」ヲ植エ、一坪十二円ノ家デス、今ハ五十円以上モカカリマセウ、西郷ニ頼マレテ獅々浜ノ今ノ家ハ私ガ世話シテ建テマシタ、ヤハリ十二円坪デス、川村伯ノハ私方ヨリモツトキレイデス、二円モ高クアリマス。又庭ヲ眺メテアノ岩洞ノ中ノ観音サンハ向側伊豆ノ江間ノ廃寺ニアリマシタノヲ買ヒ、船ニテ爰マデ送リ、此洞ニ入レマシタ、チヨウドヨク入リマシタ。裏座敷ニ両人ヲ誘ヒ此上ノ山頂マデグルリト私ノ地所デス、千余坪アリマス、植附ケタ松ガコンナニ延ビマシタ「キヨウチクトウ」モコンナニ大クナリマシタ、一丈以上デス、其畑ノ周囲ノ「キヨウチクトウ」ハ皆私ガ差シマシタ、一昨年ノガ皆ヨク附キマシタ、松ト芝計リガヨクツキマス、二本ノ「キヨウチクトウ」ハ檜ヨリモ高ク花、紅ニシテ香モヨク朝四時カラ釣ニ出デ六時頃ニ帰リマス、其余ハチヨツトモ出マセン—両人辞去ス、玄関ニ送ラレ又自ラ案内シテ門ノアル切リ通シノ手前ヨリ石階数十級ヲ廻リ上リテ、一百尺ニシテ四明亭ノ眺望台ニ至ル、六角堂ニシテ秋瓦石米国産松材ノ天井、鉄柵四ケ処ヲ囲フ、此処ハ元ハ光リタル岩デス風ガ強クアタリマスカラ丈夫ニ螺旋デ柱等ヲメテアリマス、余曰ク寝仏山トハドチラデゴザリマス、侯東方伊豆ヲ指シ曰ク、アレデス、寝釈迦山デス、顔ガアレデス、手ヲ組ンデ居リマセウ、アノ顔ト胴トハ別ノ山デス、顔ノ山ノ麓ハ修善寺デス、二人曳ノ人車ニテ二時間計リデ爰ニ来マス、台下洋中ノ岩ヲ指シ、此岩石ヲ伝リツツ土石ニテ埋メ突堤ヲ築キ、アノ山下ノ小川ヨリ真立ニ狩野川ニ掘割ヲ堀レバ爰ハヨキ港ニナリマス、四五隻ノ船ハカヽレマス、ソシテ狩野川吃水浅キ汽船ハ入リマス、四明亭トハ元ハ薩陀峠ニアリマシタ亭ノ名デス、爰ニ遷シマシタ、此額面ノ筆ハ支那人張某ノデス、侯ハヨク談ズ、一見旧識ノ如シ雅量ノ君子人ナリ、

508頁（9月）十五日秋期洗足会ニ赴ク、目賀田氏ト同行、海舟伯ニ奠墓、同別荘ニテ例ニヨリ親戚故旧打チ寄リテ詩歌献詠朗読、各自行厨ヲ開ク、伯家ノ厚意ニテ昼飯ヲ饗セラル、旧君徳川慶喜公ヨリ御揮毫「葛法帰一」ノ額幅ヲ賜ハル、余家ノ重宝トス。

513頁（12月28日成東宿泊）宿帳ヲ繰リツツアリシニ本年四月廿六日乃至五月六日早川省義五十一年軍人ト記ス、偶然感傷多シ、氏ハ本月廿二日ニ逝去ス、又同君令閨路く四十七年、令娘わ歌十六年ノ両女モ五月二日三日宿泊四日乃至六日令兄高松寛剛氏止宿ス。同兄弟ハ沼津兵学校同窓ノ親友ニシテ両氏共ニ陸軍佐官ナリ。

515頁（明治37年1月）十二日大学校出仕武官ハ校長、副官山中柴吉、造船中監山崎青木、機関中島氏ノミ残リ、余ノ学生職員ハ夫レ々々乗艦転任、弥々開戦ノ準備、風雲甚ダ急ナリ。（中略）（2月）八日市内ノ光景色メキ初ム、近衛予備兵等陸続出京本郷、神田辺ノ家々、軍用旅舎ニ宛テラレ夜具ノ賃借ニ苦シメリ抔ノ話アリ、午后十一時日露開戦ノ序幕切ツテ落サル、旅順攻撃我海軍大捷、（中略）廿五日ヨリ水路部出仕トナル、日露戦終結迄ニ磁気学、羅針自差ノ校正、添削等及二三種反訳ヲナス

第六冊

531頁（明治38年4月5日）出征友人第四軍工兵部長少将古川宣誉、鴨緑軍臨時兵站監少佐横地重直氏ニ「ダイニング、サルーン、ピクチューア」一冊宛、及湯ノ花一箱宛ヲ贈送ス。十四日退出ノ途中ニ田口卯吉氏ノ病状ヲ訪フ、昨夜死去スト嗚呼哀哉、君ハ方今著名ノ博士、余ガ沼津在学中乙骨先生ノ同塾生タリシガ余ハ碌々彼レハ此ノ如シ、氏若キコト二、三歳、傷無限、

第七冊

711頁（明治39年5月）十一日山本正枝君ノ招待ニ赴ク、乙骨太郎乙、中根淑、石橋好一三先生、野沢房迪、永峯秀樹、某氏、余等ノ旧友連中ノミ、故淑儀君霊前ニ懐旧閑話、又江田島在勤中ノ珍談、話頭ニ真情流露、殊ニ清会。廿四日育英会長榎本武揚君ヨリ余ガ同会々計主任ノ微労ニ酬ヒラレ横額絹地ニ「方寸湛然」ノ染筆ヲ贈ラル。

726頁（明治39年8月18日）護国寺ニ入ル、堂後裏山ノ墓地、諸堂ヲ細看ス、墓三条実美公、山田顕義伯、大隈重信伯ノ母堂三井子。旧幕人陸軍大佐関迪教。

第八冊

730頁（明治39年9月）四日徳川慶喜公家令豊崎信氏来訪、同公令息誠氏ガ兵学校入学志願ノ準備教育ヲ依頼セラル

731頁（十月）四日榎本武揚子、島田三郎、田口乾三氏ヨリ上野東照宮社地確定出願ニ其賛成ヲ求メラレ、同意ス。

734頁（10月）廿日麻布中学校々長ハ余ガ恩人江原素六氏ノ校長、教頭ハ清水由松氏、幹事ハ村松一氏、等諸教員ニ面会、物理授業ヲ視ル、他ハ批評、懇談。

735頁（10月）廿八日駿東郷友会第三回例会ニ出席ス、会場ハ帝国大学構内旧御殿内、会長江原素六、矢吹秀一、神保長致、天野可春、石橋絢彦等ノ老人連及少壮年者相会シ茶菓ノミノ質素ヲ旨トス、各自説話五時散会。

737頁（11月）十五日本邦創建戦艦一万九千噸薩摩ノ進水式挙行　天皇親臨、皇太子行啓、横須賀船渠ニ於テ行ハル、余夫婦ハ玉座ノ左側ナル拝観席ニテ其実況ヲ陪看ス、

740頁（12月）廿三日第六天町ノ徳川慶喜公ヨリ洋服地一着ト金三千疋恵賜、令息誠君ニ教授申上ゲシ為メナリ。

741頁（明治40年1月元日）廻礼、徳川公、乙骨中根両先生等二十余氏、二日大雪終日閑居、聖世ノ逸民住居、四十余年前乱世困難ノ時ニ比シ回顧スルニ斯モ進歩、変遷セル話歴ヲ実験得スル余ハ何タル幸運ゾ、一層感興深シ、余ハ沼津ナル静岡藩立兵学校第一回資業生ノ優等席ヲ占メタルモ其甲斐ナク、碌々タルニ、同級生島田三郎氏ノ代議士、矢吹秀一氏ノ男爵陸軍中将、同古川宣誉ノ中将、又乙骨先生許同塾生ノ昨年物故セシ田口卯吉、丸善書店ノ総支配人小柳津要人等ノ諸君ハ皆当世知名ノ人物トナル、嗚呼余ノ菲才、恥ツベシ、余ノ子孫タル者名ヲ挙ゲ家ヲ興セ、乃祖ノ如ク朽果ル勿レ、

747頁（3月21日）井出謙治中佐（後大将）ヨリ静岡県田子浦村深瀬治作長男一郎氏ノ海員志願ニ付教育ノ依頼ヲ受ク。

750頁（5月5日）島津忠重公ヨリ招待、袖ケ崎邸内ノ園遊会ニ参ス、躑躅ノ紅白花満開、老松、所謂ル高尾遺愛ノ大楓樹、樹木参若、園ハ丘上、丘腹ヲ占メ、其下ハ大崎村田圃ノ広莫タル、品海ノ眺望。余興ニハ西洋手品。剣投ゲ。ピストル受ケ。手踊数番。五時頃立食。来会者ハ薩摩出身ノ名士、当代ノ英傑、枚挙スベカラズ、余ガ知ヲ辱フセシ人々ニハ大山元帥、東郷大将、樺山大将、川村大将、上村中将、餅原中将、其外海軍々人、牧野文部大臣、小牧昌業博士、準薩摩系ニハ斎藤大臣等五

六百人。ビール店、茶店、菓子店、平野水店等アリ、給仕ニ婦女ナシ。令夫人令嬢等盛装、花顔、細腰、花ヲ欺クモノアリ。又皺面婆、臼大的、老若男女。立食場ノ卓上薩摩特種ノ酒ずし。洋食品。ビール、葡萄酒ヲ併べ、各自飲食自在微醇陶酔、歓喜ノ状扼スベク。海陸軍楽隊其間ニ奏楽、興ヲ添フ増シ、立食終リ例ノ如ク楽隊ヲ先頭トシ樺山大将ハ某婦人ヲ、東郷大将ハ某貴婦人ヲ伴ヒ来客続行、余モ亦行進、芝生庭内周囲進行数回ス、甚ダ勇マシ、他ノ園遊会ニ似ズ芸妓等モナク、流石ハ薩南武士的ノ遺風モ見エテ快シ、進行後主人公ヲ胴揭シ拍手歓呼沸クガ如シ、夕刻退散、我ガ徳川公ニモ斯ノ如キ情緒濃厚ノ会合アリタシ、後此事アリ

753頁（5月）廿五日社会教育会所属洋劇倶楽部発会式参観、すみ子ヲ伴フ。弟重秀ハシーザー。沢村宗之助ハブルタス。

753頁（5月）三十一日陞叙高等官二等――余ガ宿望ヲ果タス、海軍教授ノ地位、最初ハ五等官ヲ限トス、余屢ニ建議周旋、三等官ニ至ル、今回余ノ退職、伊地知彦次郎氏ガ甚大ノ斡旋ト坂元俊篤君ノ同意周旋ニ原ヅキ五ケ年以上三等官ニ在職、功労顕著者ノ一人限リ二等ニ陞叙シ得トノ勅令発表、偖マリ余ニ共恩命ヲ下サル。陸軍教授モ為メニ同資格ヲ得タリ、後来一人限リハ変化ナシ、唯勅任待遇テフ新例ヲ開カレタリ。余是迄ノ苦辛々防ハ甚大ナリシナリ。後人之レヲ知ラザラン、故ニ我田引水ノ嫌アレドモ始末ヲ記シ置ク。職ニ忠直、濫リニ職ヲ変ゼズ忍耐不倦、是レ人生ノ大事。余ガ家格旧幕目見エ以上即チ方今奏任官ニ匹敵スルモノナリ。旧幕政府五位以上ノ士ハ白襟乗馬格、方今政府ニ当ツレバ勅任ニ相当ス、勿論旧幕政府ヲ方今政府ニ比シタルノミ。故ニ若シ余ガ旧幕府当時ナラバ白襟乗馬格布衣以上、荒川家祖先ニ対シ栄誉ナリ。

755頁（6月）八日辞職願書差出。余、明治四年駿州沼津兵学校生徒ヲ辞シ、静岡藩ノ許可ノ上、同志永峰秀樹、中川将行、矢吹秀一、吉田一郎四生ト共ニ海軍修行ノ為メ出京ス、同年九月海軍兵学寮十三等出仕拝命教職ニ就ク、当時一等官乃至三等ヲ勅任、四等乃至七等ヲ奏任、八等乃至十五等ヲ判任トス、十三等ノ月俸二十五円ナリ。現今ノ海軍大将山本権兵衛、同大臣斎藤実、中将等歴年生徒ニ教ユ、初期ハ数学、中頃ハ数学航海術、末ニ数学、力学ヲ授業ス、明治二十九年末海軍大学校ニ転勤、現今迄三十六年間、欧米各国巡回視察、今回ノ進級、従来ノ希望モ円満ニ果シタリ。今後教授ガ勅任ニ昇進シ得ルハ大臣、次官、大学校長、教育本部長、特ニ同一部長伊地知少将ノ斡旋尽力甚タ多シ、余仕官セバ勅任以上ニ進マント決心セシガ辛フジテ之ヲ果シタリ、唯々此レ忍耐辛防ニ因ルノミ。十六日真野文二氏ノ大礼服ヲ借用シ家族一同ト写真ヲ撮ル。

（中略）（七月）十四日乙骨太郎乙先生、吹田順助氏ガ大学卒業ニ付謝礼ニ来訪、吹田氏ハ徳川慶喜公ヨリ補助金支給、数年間世子慶久君ノ学友トシテ同棲セラル、初メ新村猛雄氏ガ世子ノ学友ニ適良ノ人物ヲ索メラル、余吹田氏ヲ推選シタルナリ。

757頁（八月）一日大学校ニ出頭、副官、校長官舎ニ謝辞。本省ニ出デ軍令部長東郷大将、次長三須中将、次官加藤友三郎中将、軍務局長武富少将、艦政本部長片岡中将、同部長宮崎少将、宮原機関中将、人事局長小倉少将、福田総監、市川機関大監、渡辺技師其他局員、高等官、教育本部属官等ニ謝辞。大臣斎藤中将ニ官舎ニ往謁ス。出羽中将、伊地知少将ニハ特ニ参邸謝意ヲ表ス、偖東郷大将曰ク永年ノ御勤労、多クノ良将ヲ出シタル――。加藤次官曰ク永ラク御勤務御苦労ニ存ジマス――。（中略）加藤定吉大佐曰ク御目出度存ジマス嘸方楽ニナリマシタラウ、是レカラ育英会ニ一層御尽力願ヒマス――。（中略）難有ク感銘ノ至リ、余ハ唯勤務大事セシノミ他事ナシ、自カラ信ズ労ハアリ功ノ録スベキナシ然ルニ斯ク名将等ヨリ褒詞慰辞ヲ受ク光栄至極、殊ニ東郷大将ガ温顔、訥弁、良将云々ノ辞ヲ賜ハル感佩至極、

759頁（8月）廿三日目賀田種太郎君ノ晩餐会ニ招カル、会者大類、三田佶、某、某、富永寛容、真野肇、今泉雄作、塩谷時敏、余ノ九人、雑談

奇話百出例ノ如ク。主人ガ毫モ韓国政事経済談ヲセズ、会者モ問ハズ。只目賀田夫人ガ在韓中実戦実況物語親衛隊兵舎視察談、該隊長ガ自殺セル房舎、捕虜ノ状態、流暢能弁一座ヲ圧倒ス。流石ハ勝伯ノ令娘。

762頁（9月）十六日牛込白銀町ナル矢吹秀一氏ヲ訪ヒ、純沼津会新設并ニ旧師謝恩会ノ件ヲ相談シ、旧情懇話、昼食ヲ受ク、同氏ノ新築家ヲ視ル、眺望良好、同氏同伴永峯秀樹氏ヲ訪ヒ、右両会ノ相談ヲ為ス、第一件ハ先ヅ永峯、矢吹、三田佶、真野肇、余ノ五人及旧師乙骨太郎乙、中根淑両先生ト隔月私宅ニ会合シ会費五十銭、其以上ノ出費ヲ禁ズ、先ヅ籤引ヲナシ会主ハ矢吹、永峯、荒川ノ順トナル。第二謝恩会ノ一件ハ第一会矢吹方ニテ相談セントス。

763頁十七日明治二十七八年役第十三回黄海々戦紀念会開催、余ハ終身社員トシテ水交社ニ第一回ノ出席。（中略）小倉人事局長、呼ビ留メテ曰ク、徳川家達公爵ハ先頃以来勅任以上ノ旧幕出身者八九名宛順次招待セラレ、小子モ先日御招待ノ栄ヲ蒙ル、其節旧幕出身海軍勅任官ノ姓名ヲ通知セヨトノ命ニヨリ貴名ヲ具申セリ、御迷惑ナクバ其侭ニ致シ置クベシ云々ト。余対フ、迷惑ドコロニアラズ願フテモナキ難有キ事ト、謝去退出ス。

764頁（9月）廿八日徳川家達公ノ御招待ヲ受ケ参邸ス。先ヅ石川千代松博士ノ動物退歩ノ話、興味津々、小島好問少将ノ鴨緑江森林経営談、茶菓、晩餐ニ洋食御饗応、陪席者ハ両氏ノ外、戸塚海軍々医総監、海軍機関少将山本安次郎、同直徳ノ二人、海軍少将成田勝郎、海軍大佐加藤定吉、同西紳六郎不参、及余。御主人側ニハ家達公、同夫人、世子家正公、令嬢二方、慶喜公令嬢、家令山内長人男ナリ。余カ父ハ旧幕新番組、余ノ如キ旗本ノ厄介次三男将軍ニ拝謁ナド特別ノ外万々アラザルナリ。然ルニ今日旧君ト親ク御談話申上グ、其光栄此上ナシ、是亦勅任拝叙ノ結果ナリ、感佩至極、父母若シ在サバ嘸カシ喜バルルナラント。頂戴ノ洋果ヲ霊前ニ供ヘ拝告ス。

769頁（10月18日）沼津小旧友会第一回ニ矢吹秀一氏宅ニ会ス、乙骨太郎乙、中根淑両先生、永峯秀樹、真野肇、主人、余ノ六人、三田氏ハ厳父葆光氏死亡欠席。旧時談、失策談。盗賊話、攫徒ニ逢ヒタル奇談、十九日駿東郷友会ニ神田多賀羅亭ニ出席、会長江原素六。秋山裕一、矢吹秀一男、横地中佐、川北朝隣、等四十人許リ。

768頁（11月）廿四日東郷大将次男実氏ノ教育依嘱、承諾ス。

769頁（12月）七日旧友小会ニ主永峰秀樹氏宅ニ会合、謝恩会ノ相談決定、出席者ハ真野肇、矢吹秀一、三田佶、余。

770頁（12月）廿六日少佐坂本則俊氏来訪、海軍部内有志諸君ガ頌徳紀念トシテ置時計、銀製花瓶一対、銀製茶器一組、五十円一封恵贈、其発起趣旨書、賛同人名簿ヲ添附、此事ハ海軍省ニテ新聞ニ出ストイフ、

772頁（明治41年正月）廿六日旧友小会ヲ自宅ニ開催、乙骨先生、佐々木慎思朗、永峯秀樹、矢吹秀一、石橋絢彦、野沢房廸、欠席者ハ中根先生、真野肇、三田佶、会名ナクバトテ余ハ四両会ト呈按ス、余等沼津兵学校資業生中毎月金四円学資金ヲ賜ル、是レ其理由ナリ、以後四両会ト命名ス。伊藤直温、佐々木慎思朗、石橋絢彦、三氏入会、本日謝恩会発起人ヲ撰定ス。勧誘分担者決定ノ件。本月ノ日記中ニハ沼津兵学校々員、小学校、及病院医師等及資業生人名簿アリ。

775頁（2月）廿五日日記ニ沼津兵学校掟書ヲ載ス。廿七日日記ニ高松寛剛君ノ日記抜抄ヲ載ス。

776頁（三月）廿三日四両会第四回会幹三田佶氏邸ニ開催セラル、乙骨太郎乙、中根淑両先生、永峯秀樹、真野肇、矢吹秀一、三田佶、岡敬孝、野沢房廸、伊藤直温、中村正寿、宮川保全、荒川重平ノ十三人、不可思議ノ談、條虫ノ話題ニ興アリ。

778頁（四月）三日舎名ヲ奨学舎トス、鹿児島私立海軍奨学会学生ノ寄宿舎ナレバナリ。

780頁（四月）十日向島八百松楼旧沼津兵学校諸先生謝恩会ニ出席、粗酒

ヲ献ジ聊カ謝恩ノ微意ヲ表ス、楼前水戸徳川伯邸内西洋館借用、少雨中一同ノ写真撮影ヲ為ス。出席諸先生ハ江原素六、赤松則良、田辺太一、乙骨太郎乙、間宮信行、石橋好一、森川重申、神保長祐、久須美祐利、榎本長祐、杉亨二、山田昌邦、熊谷直孝、並木元節ノ十四君。旧資業生ハ矢橋祐、佐々木慎思朗、永峯秀樹、荒川重平、高松寛剛、真野肇、渡辺当次、成沢知行、鈴木知言、三田佶、遠藤信古、古川宣誉、大平俊平、矢吹秀一、入江倫愛、伊藤直温、石橋絢彦、岡敬孝、仙波種艶、諏訪功、瀬名義利、新井秀徳、永井久太郎、加藤義質、佐久間正、中川喜重、末吉択郎、横地重直、成瀬隆蔵、宮川保全、松山温徳、木村才三、永峰源吉、中村正寿、水野勝興、新家孝正ノ四十人ナリ。初メ余ハ昨年矢吹秀一君ヲ訪ヒ旧情ヲ談シ、偶々諸先生ノ旧恩ニ言及シ、尋イデ四両会ヲ創シメ、遂ニ本日ノ挙行ニ至レルナリ。席上矢吹秀一男ヲ総代謝辞ヲ述ブ、江原先生答辞、間宮先生同、杉先生ノ演説ニ今日文明ノ基礎、遠ク長崎ニ在リ、先生七八才ノ当時、高島舟帆先生ノ小銃、種痘ノ話、五平太船ノ事（五平太ハ石炭ノ称）、等等論及ス、先生本年八十四才?ノ高齢、其ノ幸福ヲ説キ、終リニ諸君ノ長寿ナランコトヲ望ム云々。諸先生モ大満足、旧生徒一同モ歓喜感情溢レ、真実愉快ノ会合ナリキ。各自相分レ、数十年逢ハザルモノ、互ヒニ面貌ヲ忘レ、君ハ誰ナリシカト問フモノ、名刺ヲ交換スルモノ。旧美少年ガ六十前後ノ老人、此中ノ若キ者モ五十二三才、各々歓ヲ尽クシテ散会ス。写真ハ保存ス。

783頁（六月）三日山田昌邦先生新築家落成開宴ニ招カル、麻布本村町丘上、古川ニ沿フ、広壮美麗ノ日本風家屋ヲ主トシ洋室ヲ交ユ、大小芸妓二人陪酌ス、来会者佐々木慎思朗、永峯秀樹、矢吹秀一、石橋絢彦、及余ノ五人。饗応至極丁重、先生ハ製鋼会社創立者渡辺一郎先生ヲ補佐シ、現今ハ其社長、富有ノ一長者ナリ。六日陸軍偕行社ニ参会、謝恩会残務整理終了。出席者ハ発起兼委員十人中、矢吹秀一、永峯秀樹、三田佶、佐々木慎思朗、岡敬孝、余ノ六人、会費不足分三十七円八銭ハ十人ニテ之ヲ負担ス。（中略）十三日四両会第四回、佐々木慎思朗氏ノ小川町自宅ニ開催、出席者中根淑先生、永峯秀樹、矢吹秀一、石橋絢彦、野沢房廸、宮川保全、伊藤直温、中村正寿、荒川重平、主人ノ十人、雑談百出、烏鷺闘技ニハ矢吹対荒川、荒川勝。永峯対中村、中村勝二回。会員中、中村氏最優者。

785頁（7月）五日徳川家達公御招待ニ参邸、出席者ハ陸軍中将佐野延勝、荒井郁之助、田辺太一、宮本小一、海軍少将滝川具和、益田孝、高梨哲四郎、荒川重平トス。講話ニ田辺太一先生ガ臆病ノ心機一転ノ実話。滝川少将ノ支那駐在中日清戦争当時ノ苦心談及日露役中独国駐在中スウエーデン旅行談。益田孝氏ノ欧米巡回商況視察談、晩餐ヲ賜フ、卓同席、公爵、世子家正両公ハ中央ニ相対セラレ、諸氏ハ其左右ニ陪シ、談笑中拝味ス、胆銘感謝。

788頁（9月）廿七日芝車町ナル宮川保全氏邸ニテ四両会開催、出席ス、永峯氏先ヅ在リ、囲碁酣、中村正寿、真野肇氏来会。ヤガテ一大伝馬船ニ乗ル、

790頁（10月）廿八日榎本武揚子薨去、其閲歴ハ略ス、但シ子爵ハ民間諸種ノ協会、学舎、等等ノ会頭、会長トシテ誠意尽力セラル、我ガ静岡育英会長タルコト数年、余ハ同会評議員、幹事ヲ委嘱セラレ、数年間親炙ス、其深キ慈愛心、任侠的、江戸児気質、其心事ノ公明清浄、余ガ景慕措カザル所。享年七十二、向島ニ参邸、其遺骸ヲ拝ス、大鳥圭介、佐野延勝、矢吹秀一男等、主人側ニハ赤松則良男等ニ面接シ、暫時其懐旧談ヲ聞キ、辞去ス、卅日故議定官海軍中将正二位勲一等子爵榎本武揚閣下ノ葬式ニ駒込吉祥寺ニ会ス、各宮殿下御名代、海陸軍将官、朝野ノ名士雲霞ノ如ク、境内広キ寸隙ナシ、特ニ旧主徳川家達公焼香、其人望朝野ニ普キヲ知ルベシ。名刺ノ数六千七百十三、参列軍隊ヲ合ハセ一万ヲスグ。稀有ノ送葬ナリ、

793頁（11月）二十三日伊藤直温会幹ノ四両会ニ出席。永峰秀樹、三田佶、

真野肇、石橋絢彦、中村正寿、宮川保全、主人、余ノ八人。会費五十銭ニハ不相応饗応ノ傾向生出シ来ル故ニ爾来食物ヲ三品ニ限ル。烏鷺戦不相変面白シ、永峯対中村、永峯対宮川。謡曲ハ中村、真野、石橋、荒川。

795頁（明治42年1月）三十日四両会々員真野肇氏宅ニ相会ス、出席者中根淑先生、永峰秀樹、矢吹秀一、佐々木慎思朗、宮川保全、中村正寿、伊藤直温、真野文二、主人、余。合計十人。囲碁。フレノロジイノ談。精神修養話。占易譚。旧話。快話。同窓旧友些ノ遠慮ナク盛会、囲碁連ハ居残レリ、徹夜ニテモアルマジ。

798頁（五月）十六日山田昌邦氏宅ノ四両会ニ出席、永峯秀樹、伊藤直温、中村正寿、余ノ四人ノミ。下谷三輪円通寺ニ於ル故榎本武揚子追弔碑除幕式兼彰義隊等戦死者法会ニ出席、余興手品等、大雨中遺族等参拝者夥シ。

799頁（5月）廿九日徳川家達公茶話会御招待ニ拝参、加藤弘之博士ノ講話。余モ講話一条ヲ為ス、航海中東西経度百八十度ヲ越過スレバ一日ヲ加ハ減スル理由ヲ詳説、地球図ヲ略記以テ説明ニ資ス、同日ハ欠席者多ク、加藤氏、乙骨太郎乙先生、宮本小一氏、余ノ四人ノミ。丁重ノ晩餐拝味、散会。（中略）渡辺当二葬式。

801頁（7月）三日陸軍偕行社ニ出席、徳川公世子家正君結婚祝献品ノ件相談、江原素六、矢吹秀一、妻木頼黄、真野文二、成瀬隆蔵、余等発起人トナル。

805頁（11月）七日四両会ニ出席ス、会主ハ野沢房廸、来会者ハ乙骨先生、佐々木慎思朗、永峯秀樹、三田佶、荒川重平、

811頁（12月）十七日大学病院ニ矢吹秀一中将手術後ノ経過ヲ尋ヌ、昨夜薨去スト。同君ハ沼津兵学校同窓ノ友、海軍修行ノ為メ出京セシハ明治四年同志ハ永峰秀樹、中川将行、矢吹秀一、吉田一郎及余ノ五人ナリ、永峰、中川、余ハ海軍兵学寮ニ出仕、矢吹氏ハ陸軍ニ吉田氏ハ某省ニ出仕、第一番ニ吉田死シ、次ニ中川逝キ、今矢吹去ル、後昭和三年永峰死ス、残ルハ余ノミ。矢吹最モ才幹アリ、日清役当時工兵大佐、工兵監トシテ鴨緑江架橋ニ成功、偉勲ヲ立ツ。日露役中ハ留守師団長、男爵ヲ授ラル、行年六十二才。痛惜ニ堪ヘズ、去月観菊御宴赤坂御苑内ニ相逢フ、氏曰ク一緒ニ帰レヨト、余ハ今少ク菊花ヲ熟覧ストテ相分ル、其時ハ至極元気、突然盲腸炎ニ罹リ其手術ヲ受ケ遂ニ薨ス、

813頁（明治43年1月）十六日大日本平和協会第四回総会ニ招カル、会長大隈伯ノ雄弁、諸名士ノ演説。廿五日偕行社ニ出席、慶喜公表慶委員ト会食ス、宮本小一氏ハ旧幕人大同団結シ毎年徳川公請招会ヲ催サントノ演説、余之ヲ賛シ葵会ヲ基礎トシ以テ団結ヲ希望スト述ブ、

815頁（二月）五日乙骨先生夫人逝去、余沼津在住先生ノ家塾在学当時厚待ヲ蒙レリ。六日乙骨先生許ニ半夜通夜。七日乙骨邸ニ参会、正午出棺、小石川原町大谷派真宗寂円寺ニテ葬式、式後千住火葬場ニ奉送ス。埋葬式ニ参列人ハ令息等友人富田鉄之助等甚ダ多シ、先生及ビ令娘令妹等婦人ハ参列セズ古風ナリ。故夫人経子ハ優姿閑様温厚貞淑、余等沼津在住、同塾生ニハ小柳津要人、故田口卯吉、故堀田徳次郎、吉田霽江、余ノ五人トス。

816頁（14日）故中村正寿夫人葬式ニ。同方会開催関ケ原以来東軍戦没者追弔会ニ。（中略）（3月12日）余ハ四両会主石橋絢彦君方許出席、永峯秀樹、伊藤直温、宮川保全、真野肇、余、会主ノ六人、囲碁両三番、夕食、歓談、雑話。夜散会。

817頁（3月30日）徳川家達公西洋巡視、且ツ外交官補令嗣家正氏渡英ニ付、旧臣有志者、両公ヲ海軍水交社ニ御招待晩餐ヲ献ズ、余興トシテ宝生九郎、松本金太郎ノ一調仕舞、素謡、落語二番、有志総代林董伯、加藤弘之博士ノ送辞、公爵ノ御答辞、会者ハ公爵夫人、令娘三方、令夫人達十四五人、合計二百三十九人。

825頁（8月）廿八日第十三回四両会ヲ自宅ニ開催、出席者江原素六先生、乙骨太郎乙先生、永峯秀樹、真野肇、伊藤直温、成瀬隆蔵、諸君、奨学

舎ヲ会場トシ、雑談百出愉快ナリシ、

第九冊

829頁（明治43年10月）二日故岸俊雄先生ノ法会ニ参ス。明治ノ初年、京橋区八丁堀ナル当時数学専門維一ノ塾主、岸先生ガ三年前北海道ニテ不遇客死セラル、当時ノ門生馬場廉、磯永某、石橋絢彦氏等発起人、品川海晏寺ニ於テ法要執行、余亦中川将行氏ト同塾ニ起臥シ、高等数学ノ教ヲ受ク、参列者ハ大沼親光、三輪昌輔、磯永某、津村福光、庄田某、馬場兼、石橋絢彦、荒川重平、故先生ノ婿庄田氏ハ先生ノ姉某ノ名代トシテ参会セラル。

832頁（11月）十九日四両会ニ三田佶氏宅ニ参会ス、主人、永峯秀樹、野沢房廸、宮川保全、伊藤直温、石橋絢彦、成瀬隆蔵、中村正寿、荒川重平ノ九人、例ニヨリ烏鷺戦数番、灼灸談、痔疾談、リューマチス談多ク、病的話。三十日（中略）江間経治葬式ニ。福田重固葬式ニ。

831頁（12月）十日徳川公御招待、華族会館ニ参ス、各自拝謁ス、華族連及夫人連ハ公爵、同夫人ト同卓、他ハ立食、家達公懇篤ノ辞、赤松則良男答礼ノ辞、天野可春氏万歳ヲ唱ヘ、一同唱和ス、且ツ同氏ガ御簾中様万歳ト叫ビ一同之ニ唱和シタルハ興味最モ深ク、旧情横溢、一同大喜悦、紀念トシテ銀製菓子函ヲ賜フ。

837頁（明治44年2月）十一日佐々木慎思朗氏会主四両会ニ出席、会員ハ乙骨太郎乙先生、山田昌邦先生、永峯秀樹、石橋絢彦、野沢房廸、伊藤直温、成瀬隆蔵、中村正寿、主人、余ノ十人、山田先生ノ珍談、汽車電車ニハ中央ノ辺安全。奇話続出、面白シ。（中略）（3月）十一日江原素六翁古稀祝賀会発起人会ニ出席。

841頁（4月）九日小石川後楽園ニ於テ徳川慶久公園遊会ヲ開催セラル、余等数人接待委員ヲ嘱托セラレ、参会ス。慶久公夫婦君、従一位公慶喜、家達御夫婦、旧臣三百数十人、此日好晴、一同歓喜、丁重ノ立食饗応、余興等。公ノ御挨拶、老公御挨拶懇切、旧臣一同感泣、御写真拝受。（12日）故田口卯吉氏七回忌追悼晩餐ニ招待、用事アリ欠席、

848頁（5月）廿二日本日ヨリ博義王殿下御通学遊サル、余参校、其様子ヲ拝視ス。（中略）廿七日四両会アリ、宮川保全氏ニ会合ス。

849頁（6月）十五日育英会資金ヲ横地重直夫人私消ノ件ニ付、赤松範一、永峯秀樹氏ト同道、事務所ニ至リ横地ヲ取調ブ、概算八千円不明ナリ。（中略・16日）昨日ハ横地夫婦横着極ル大罪事件嗚呼、十八日赤松範一氏方ニテ父上則良閣下、永峯秀樹、余ノ四人、横地事件処分相談、弁護士播磨某ニ委頼スルニ決シ、幹事三田佶氏ニ此事件通知。二十日横地鉱子私消事件ニ付、育英会役員会開催、会長赤松則良以下九人出席、範一氏ハ事件ノ経過報告、種々相談、事務所ハ当分範一氏方ニ置キ寄宿生ハ謝絶退舎ニ決ス。

851頁（6月）廿四日旧沼津兵学校先生赤松則良、江原素六、乙骨太郎乙三君ノ古稀祝宴ヲ木挽町九丁目みどり屋ニ開ク、之ニ真野肇氏ヲ加フ。幹事山田昌邦君祝辞ヲ述ブ、江原先生答辞、新橋一流ノ名妓五六人周旋、舞踊数番、名ニシ負フ粋人山田君ノ世話役ノコトナリ、紅□ハ美、酒肴モ佳、主客陶然、歓ヲ尽クス、中村正寿氏ノ茶番ニ頤ヲ解カシメ、次イデ真野、荒川ノ仕舞ナド近来稀有ノ愉快ノ会、出席者ハ山田昌邦、三田佶、佐々木慎思朗、永峯秀樹、瀬名義利、石橋絢彦、永井久太郎、成沢知行、野沢房廸、中村正寿、宮川保全、伊藤直温、中川喜重、岡敬孝、荒川重平ナリ、会費金五円。（中略）廿七日乙骨先生来訪、今回育英会事件ニ心配セラレ、御注意アリ難有シ、蓋シ会計監督ノ任ハ余ガ尚ホ継続セルモノト思ハレ殊ニ心痛セリト仰ラル、御親切ハイツモ胆銘スル所ナリ、師弟ノ深情此クソアリタケレ。余ハ先生ヲ視ル父上ノ如シ。

853頁（7月）十九日水交社ニテ育英会役員会開催、会長副会長評議員一同、損害金ニ対スル年利四分八厘ヲ弁償スルコトニ決ス。

858頁（9月7日）旧幕府及ビ御三卿即チ田安、清水、一ツ橋三徳川家ノ

旧臣ヲ一団トセル一会ヲ創立、之ヲ葵会ト称ス。余モ入会ス。下谷三輪ナル円通寺ニ設立ノ大鳥圭介追弔碑法要ニ会ス。同方会、碧血会（箱館戦争関係諸氏ノ会）、有志者、集会、講談、剣舞、空也念仏ノ余興アリ。

863頁（11月21日）徳川家達公ノ茶話会御招待ヲ辱フシ、拝参ス。出席者ハ宮原次郎男、横浜市長荒川義太郎、陸軍少将山口勝、箕作元八博士、津田弘道男、矢吹秀一嗣子省三男、余ノ七人。御主人側ハ公爵夫婦、令嬢御三方、家令山内長人男、家扶尾貫徹氏。山口氏ノ欧州視察談、箕作氏ノ風俗変遷談アリ。晩餐日本料理ヲ拝味、山口氏ノ快談、壮語ニハ一座興ニ入ル、公爵ノ寛宏々度衆ヲ容ルルノ襟度ニハ益々尊敬ス、旧時ナラバ余ノ如キ遥カニ尊容ヲ遥拝スルニ止マルニ今カク同一食卓ニ親ク御応答申上グルコト、難有キ極ミナリ、名簿ニ何カ書記セヨト仰セラル、「万法帰一」ト記ス。悪筆ニハ毎々閉口ス、御菓子拝戴、人力車モテ千駄ケ谷駅ニ送ラルル。

866頁（12月）二十七日故友人小野沢敬二氏ノ息敬一氏再ビ来訪、亡父墓建立ノ寄附金強請、余リ五月蠅シ、五十銭投与、父ノ墓ニ他力ヲ乞フ、嗚呼澆季ノ世、或ハ騙者カモ知レズ。

868頁（明治45年正月）三日徳川家達公ニ拝謁ス、酒肴ヲ賜リ献上セシ葱ニ対シ親シク謝セラル、亡父ニ対シ面目ヲ施セリ。

872頁（三月）一日池辺吉太郎氏葬式ニ青山ニ列ス、氏ハ熊本人、西南役ニ有名ノ吉十郎君令息、是亦一人物、永峰秀樹氏長女均子ノ良人ナリ、

873頁（3月30日）真野文二令息正雄氏菅田くめ子結婚披露会ニ上野精養軒ニ招カル

874頁（4月13日）宮川保全氏ハ女子職業学校創立者トシテ功労賞藍綬褒章下賜セラル、其祝宴ニ招カル、余興ニ三弦ノ曲、洋食饗応、会場ハ精養軒来客夥多。

879頁（6月）九日白金三光町興禅寺ニ故岸俊雄先生碑除幕式ニ参列ス。先生ハ会津人、明治初年東京八丁堀ニ数学塾ヲ開ク、芝新銭座攻玉塾ト並ビ称セラル、余ハ兄溝口善補親友中川将行氏ト入塾、寄宿ス、高等数学々習、此回同塾旧友沼津出身石橋絢彦君余等発起人、建碑及ビ墓石ヲ建ツ。

881頁（7月）六日四両会員野沢房廸氏死去

891頁（9月）十四日早朝新聞号外、乃木大将夫妻殉死ヲ伝フ。（中略）洋人等武士道ノ何タルヲ解スルヤ否、余等言ハント欲スル所ヲ知ラズ。明治ノ初頃福沢諭吉氏ハ楠氏忠死ヲ評シテ権助ノ死ト同一視シ、物論ヲ惹起セシコトアリ、此回某博士之ヲ評論痛撃シ遂ニ職ヲ解カレタリ、赤穂義士ハ義士ナリ。一死君ニ殉ス、忠ニ非ラズシテ何ゾ。

895頁（11月）二十日四両会主成瀬隆蔵氏ニ会ス。江原素六、乙骨太郎乙両先生、真野肇、永峯秀樹、佐々木慎思朗、宮川保全、石橋絢彦、中村正寿、伊藤直温、荒川重平、主人ノ十一人。相変ラズ思モ掛ケナキ雑話奇談面白ク楽カリシ。

899頁（大正2年）（二月）三日旧漢学恩師中根淑先生去月二十日駿河興津僑居ニテ逝去、遺言スラク海岸ニ荼毘シ灰燼トシテ散飛シ痕跡ナカラシメヨト、其平生ノ気魄思ヒヤラル、又死期ヲ予知シ自若泰然。山岡鉄舟ニ似タリ、先生ノ豪胆ナル、優雅ナル、文筆ニ著名巧妙ナル、詩歌ニ巧妙ナル、絵画ニモ入堂セラレタル、著述モアリ、逸話モ多シ、書肆博文館ノ顧問タリ、余ハ最モ推服尊敬ス、乙骨太郎乙先生同君トハ性質全然相反シ而シテ乃チ莫逆親友タリ、御遺族ナシ乃チ其甥本郷曙町ナル西村？（付箋）「西村氏ノ名ハ沼津兵学校生徒名簿ヨリスベシ」君ヲ訪ヒ弔詞ヲ呈シ、其逝去迄ノ御容体ヲ拝承シ、感嘆ノ外ナシ。

903頁（4月6日）染井墓地ニ故山本大佐ニ展墓、草花ヲ手向ク。

907頁（6月24日）荻野吟子病死ス、日本開業女医ノ祖ナリ、同女ハ妻やヘト共ニ医ヲ修ム、明治十六、十七年余家ニ寓居セリ、日記ニ帖附ノ新聞紙切抜ヲ見ヨ。

919頁（9月）廿八日葵会ニ水交社ニ出席。徳川両公爵両令夫人、令嬢、

来臨、旧臣参会者百六十人許、模擬売店開始、食堂内立食、座食、副会頭平山成信氏御挨拶、公爵御答辞、活動写真開始、独逸山景、海軍大演習、犬ノ忠義、靴足袋、新馬鹿大将滑稽等、

920頁（10月）二十日山田昌邦氏宅ニ四両会開催。会者佐々木慎思朗、永峰秀樹、真野肇、岡敬孝、宮川保全、伊藤直温、中村正寿、主人、余ノ九人。（中略）二十八日目賀田男、真野肇氏余三人郊外散策、故近藤勇ノ女たま子ノ夫宮川勇五郎ヲ調布ニ訪ハント同行、新宿辺ニ至ル。

923頁（11月）十七日池上街道鹿島神社前ニ中川喜重氏ヲ訪フ不在、（中略）二十一日？前将軍慶喜公薨去。二十二日徳川邸参侯ス。二十三日又伺候ス、葬儀委員ヲ嘱托セラル、委員日誌、御通夜日誌作成ノ可及的尽力ス、御通夜ニ列ス。

第十冊

924頁（11月）三十日慶喜公御葬送当日。余ハ庶務分担。午后一時御出棺上野寛永寺傍側新設祭場内神葬式執行、渋沢栄一男ヲ委員総裁、沢鑑之丞氏委員長、式場一式建造物ハ同男寄進、旧恩奉答ノ意カ、其行列ノ盛大厳粛、奉送者ノ夥多ナル、沿道市民誠意弔悼ノ状、感泣ノ外ナシ。上野天王寺ニ葬リ参ラス

925頁（12月）廿五日伊東温泉行。

930頁（大正3年1月7日）三島駅ヲ過グ、往昔沼津兵学校生徒タリシ時曽遊ノ地懐旧情切、三島駅乗換ヘ品川着、

933頁（4月）六日永峰秀樹氏宅開催四両会ニ出席。

945頁（8月31日）本月ハ石橋好一先生ノ葬式。

949頁（9月27日）舎宅ニテ第廿五回四両会ヲ開催、出席者石橋絢彦、永峯秀樹、三田佶、佐々木慎思朗、宮川保全、伊藤直温、真野肇、中村正寿、成瀬隆蔵、岡敬孝、瀬名義利、臨時ニ江原素六先生。欠席ハ乙骨山田両先生ノミ。

951頁（11月）十五日四両会ニ三田佶氏宅ニ会ス、会員総出席、紀念トシテ幽閉瀟洒ナル同庭内ニ一同写真撮影、二十八日徳川家達公ヨリ御招待、席末ニ列ス、出席者ハ山内長人中将、村田淳中将、佐藤少将、矢吹中将、田中義正？博士、草間時福、中島与曽八少将、及予ノ八人。洋食晩餐ヲ賜フ。主公御夫婦、令世子家正、令嬢。田中博士ノ夜話ノ談ハ興味津々、其御伽役ノ名義ニテ談話連ヲ集合シ夜話ヲサシメ実地ノ実学、民間ノ事情、万般ノ知識ヲ研ケルナリ。又同氏ノ武田信玄、豊公、東照公等ノ逸話数多アリ、食後復タ史談、奈良興福寺等ノ白拍子、風流、猿楽、田楽等、音楽ノ濫觴皆寺院ヨリ発ス云々。

967頁（大正4年4月）四日練習艦阿蘇宗谷横須賀ニ入ル、其乗組士官候補生ノ旧薩藩人懇親会ヲ造士会ニ開催、

969頁（5月）十五日徳川家達公御招ニ参邸ス、旧幕府名士ノ集会、隔意ナシ、萩ノ餅、酢等ノ模擬店ニ遠慮ナク頂戴シ、里神楽、馬鹿囃、剣舞、支那人手品術ノ離レ業ニハ感心ス。（中略）立食洋式料理ヲ賜フ、又公爵ノ御挨拶ニ旧臣諸君ノ因縁深遠ヨリ説キ起サレ、今年東照宮三百年ニ当リ、諸君ノ厚キ祭典執行ヲ喜バレ、又其紀念ノタメ同門一族発起ノ教育資金募集ニハ諸君ノ同情ヲ受ケタルヲ悦バレタル等、御説話難有シ、岡崎ノ本田家某来客総代トシテ謝辞ヲ呈シ、加藤弘之男ハ東照宮、文教ヲ布カレタルハ三百年ノ太平ノミナランヤ、万世ニ渉リテ其功績偉大ナリト。右紀念資金ノ議ヲ賛嘆答辞ニ代ヘ、一同公爵家万歳ヲ三唱ス。廿三日吉田貞一機関中将夫人逝去、夫人ハ陸軍大佐故武田成章ノ女、余ノ亡妻幸ハ其義叔母ナリ、（中略）三十日宮川保全氏方、四両会ニ出席、相モ変ラズ旧友ト雑話放談、愉快、帰途ハ江原素六先生ト三田佶氏ト同行。

972頁（八月）一日四両会幹事伊東直温氏開催、多摩川鮎漁ニ赴ク、新宿追分発京王電車、会者ハ永峯秀樹、岡敬孝、中村正寿、石橋絢彦、成瀬隆蔵、余ノ七人、

981頁（9月）五日造士会沿革、同定款、奨学会第十三回報告、造士舎四十五年度、大正元、二、三年度報告書ヲ三輪修三氏ニ贈ル、静岡育英会寄宿舎建設ノ参考ニ資スルナリ。

982頁（9月）十六日田辺太一蓮舟先生逝去享年八十五、往弔、先生ハ維新後沼津兵学校ノ教授、余ハ其漢文教示ニ預ル。十七日上野東照宮三百年祭ニ参ス。恰モ良シ江戸博覧会開催、之ヲ看ル、（中略）二十七日大久保勇子ヲ訪フ、同女ハ故大久保利通公ノ権妻、京都有名料理店一力ノ娘トイフ、四男ヲ生ム長ハ達熊氏、余ガ家ニ寄宿シ学科修行、明治二十年？兵学校生徒、卒業、少尉ノ時肺患病歿、爾来数年音信絶ヘザルモ懐サノ余リ余夫婦本日之ヲ訪フ、六十九才、二十八九年振リノ面接。（中略）本月ハ青山ニ田辺先生葬式。

984頁（10月）十六日同方会参拝団員トナリ日光東照宮三百年祭ニ赴ク、同行八十人、

998頁（大正5年2月）二十六日四両会幹事真野肇氏宅ニ会ス、佐々木、永峯、岡、伊藤、中村及余、主人、令孫正雄氏ノ八人（中略）（3月）廿九日明治学院教員文学士三浦太郎氏ヲ訪ヒ、造士会ノ嘱託教授ヲ依頼ス、英、数、物、化、国漢、地暦、七科ノ教員撰択并ニ報酬一時間一円ノ件迄協議シ承諾ヲ得、人撰内相談決定ノ上余ニ通知後、同校ノ井深梶之助総理ニ申シ出ヅル事トス。

1003頁（5月）二十一日碧血、同方連合会ニ出席ス、富士見町富士見楼上、松平正親氏ハ故太郎君養子ニシテ雑誌「江戸幕府ト諸大名」ノ著者ナリ、其経暦談、村山某ノ滑稽的講談話、大神楽、手品、源水独楽廻シノ曲芸、模擬店ニハ「オデン」、団子、酢等ヲ供セラル、洋食饗応、食費五十銭并ニ壱円ヲ寄附ス、碧血会ハ箱館戦争ニ従役ノ榎本氏以下残存者ノ会、同方会ハ旧幕人一般ノ会合ナリ。（中略）二十八日四両会幹事中村正寿氏宅ニ会ス、江原素六、乙骨太郎乙両先生、石橋絢彦、瀬名義利、真野肇、岡敬孝、宮川保全、伊藤直温、主人、余ノ十人、旧談快話、興尽キザレド午后九時散会。

1006頁（6月）二十日山田昌邦先生ノ招待ヲ受ケ築地静養軒ニ参会ス、諸名士揃ヒ余ノ知人ニハ海軍中将西紳六郎男、加藤定吉中将、宮原総監、大木治吉総監、木村浩吉少将、松村直臣少将、佐々木慎思朗、手島精一、渡瀬寅次郎、陸軍将官中川元太郎、夫人、令嬢、八九十人許、（中略）先生ノ経暦談、挨拶、謝辞、来賓総代加藤中将ガ軽妙ナル答辞、面白ク散会。

1013頁（8月）十一日鎌倉本妙寺ニ上村大将葬式ニ参列ス、余ハ造士舎々員総代トシテ自作弔詞ヲ読ム、（中略）造士会ノ起源ハ遠ク明治十四年ニ胚胎ス、同十九年曲于学舎起リ、同二十二年盈進黌ノ設立アリ、同三十四年在鹿児島海軍奨学舎、同四十一年在東京海軍奨学舎ノ創設ニ関シ閣下常ニ奔走斡旋セラル、越エテ四十四年之ヲ造士舎ト改称シ学舎ヲ新築シ、乃チ事業ノ基礎粗ホ成リ以テ今日ニ至レリ、

1018頁（9月）三十日貴族院議長官舎ニ徳川家達公ノ茶話会御招待ニ拝参ス、洋食御丁重饗応、席次ハ定メズ余ハ老人ナレバ公ノ御側ニ着席セヨト、余リ御辞退モ返ツテ不可ト思ヒ家達公ノ左方ニ重平、キタ川某、右方某、植村澄三郎、向側中央、家正世子、其右ニ中島与曽八、松村直臣、左ニ神保小虎、某、岡野敬二郎、「テーブル」端ニハ箕作元八、其対側ニ成田勝郎氏トス、晩餐終リ、神保氏ノ上水、井水等ニ関スル地水ノ講話、氏等洋行中失策談、方言ノ笑話、一同歓興ヲ尽クシ、旧君臣ノ温情殊ニ麗シ、感胆至限、例ニ依リ記名ス、余ハ第一ノ老人ナレバトテ月日署名、拝辞シ去ル。（10月）二十八日水交社ニ葵会総集、会長赤松則良男、副会長山内長人、平山成信氏辞任、会長ニ江原素六、副会長ニ村田淳、沢鑑之丞氏推薦セラル。（中略）会員百五十人許、余興手品。（中略）旧友ト卓ヲ同フシ愉快談笑、江原氏欠席、村田氏御挨拶、公御懇切謝辞。

1021頁（十一月）一日正覚会第三十四回ニ参聴、福島安正、神尾光臣両陸軍中将入会（中略）明治十九年禅会最初創立以来、三十年間ナリ、余ハ

三十一年ニ入会、後幹事、今日ニ至ル。

第十一冊

1022頁（大正5年11月）二十三日四両会ニ成瀬隆蔵氏宅ニ会ス、盛会。

1024頁（12月）廿四日相州湯河原温泉ニ赴ク（中略）維新前沼津東京間往来数回徒歩旅行ノ昔ヲ偲ビツツ（中略）小田原ニ入リテハ「うゐらう」ノ看板ニ懐旧情ヲ催シ、熱海行軽便汽車ニ乗リ換フ、（中略）隔世ノ感深シ、

1033頁（大正6年4月）十六日四両会ハ上野東照宮脇梅川亭ニ開催。幹事岡敬孝君。会者真野肇、岡敬孝、永峰秀樹、三田佶、伊藤直温、中村正寿、石橋絢彦、荒川重平ノ八名。筑前琵琶師榎本紫水氏演奏、本能寺ト乃木将軍ノ曲。岡氏令孫亦一曲ヲ奏ス、例ニヨリ囲棋、夜散会、

1035頁（5月）十日四両会ニ出席ス、幹事ハ瀬名義利氏ニシテ陸軍少将、遊就館々長ナリ、同事務所ニ開会。出席ハ乙骨先生、岡敬孝、真野肇、永峰秀樹、三田佶、宮川保全、成瀬隆蔵、伊藤直温、中村正寿及余、主人ノ十人。主人自ラ案内、館内ヲ隈ナク、陳列品中注目スベキ品ノ重ナル者ヲ説明セラレ、今マデ知ラザリシ即チ気附カザリシ古器、刀剣、発掘物ヲ観ル、主人ハ刀剣ニ精通、鑑識家ナリ。終リテ神社向ヒノ有名ノ鰻蒲焼料理店某ニテ饗応アリ、前会決議ノ十日ハ故障アリテ奇数ノ月ノ第四日曜日ト改マル。

1036頁（5月）十三日戊辰殉難者五十年祭大法会ヲ上野寛永寺ニ開催。碧血会、旧交会、同方会、田安旧誼会、一橋会、葵会ノ発起ナリ。一山僧侶数十人読経、儀式極メテ荘重、丁寧、終リテ御霊屋参拝、終リテ永峰秀樹、瀬名義利、余三人ニテ上野広小路、元雁鍋跡ノ「世界」料理店ニ入リ昼食ス、雁鍋ハ旧時著名ノ飲食店、上野戦役当時、官軍ハ其二階ヨリ彰義隊ヲ砲撃セリ、後永ラク続キシガ方今ハ牛鳥肉料理兼一般料理店トナル。

1038頁（6月）十一日水交社ニ於テ江田島会開催、出席、後偕老会ト称ス、春秋二回ノ予定。永峰秀樹、熊倉興作、市川俊雄、小花万次、平山信、川野健作、浦口善為、酒巻貞一郎、細川源三郎、山田内田両主理、山賀新太郎、小野邦尚、板橋盛俊、山川弘毅、清水清蔵、荒川重平。発起者ハ荒川、永峰、板橋、山川ノ四名、

1039頁（7月）廿二日上野ナル常盤花壇ニ四両会開催、石橋絢彦氏幹事。出席者江原素六、乙骨太郎乙両先生、真野肇、永峰秀樹、三田佶、伊藤直温、岡敬孝、成瀬隆蔵、瀬名義利、宮川保全、石橋絢彦、荒川重平及臨時出場永井久太郎ノ十三日ニテ盛会、同窓ノ学友、何ノ遠慮モナク放談快話湧クガ如シ、八時半散会。

1041頁（7月29日　函館旅行）五稜郭ニ入ル、郭ハ亡妻ノ義兄武田成章氏ノ創建セル者殊ニ懐旧ノ情深シ、榎本武揚氏トハ育英会ニテ数年間、同氏ヲ会長トシ予ハ評議員幹事トシテ愛顧ヲ受ク、又余ガ旧友モ此地ニテ戦役ニ従ヒシ者モアリ、

1051頁（8月25日）留守中中村正寿氏病死、

1052頁（9月）三日静岡育英会評議員会ニ出席、発展策協議。（中略）二十三日四両会ニ永峰氏宅ニ会ス。

1053頁（10月6日）静岡育英会総会ニ水交社ニ出席、余ガ年来ノ主張説即チ同会ヲ静岡県人及旧幕府ノ子孫云々ト改ムルコトヲ発議シ幸ヒニ山口勝中将、永峰秀樹君、松村直臣少将、中島機関中将ノ賛成ヲ得テ可決トナリ、会長赤松男満期ニ付平山成信君ヲ会長ニ推シ、規則改正案ニ静岡県人ノ一句ヲ入レ其外全部ヲ決シ大ヒニ発展セントス、新タニ評議員補欠ヲ成シ散会ス、実ニ愉快ナリシ。七日徳川家達公御夫婦世子家正、徳川慶久公ヲ水交社ニ御招待ス、葵会主催ス、会長江原素六君、副会長補欠アリ、陸軍側ニ山口勝中将、海軍側西紳六郎中将当選、余興ニハ貞山ノ講釈、丸一ノ手品、松井源水ノ独楽曲、人真似芸ニハ絶倒セシム。十一日平山成信氏ヨリ信書、育英会総裁ヲ家達公ニ願ヒシニ御快諾、爾今

援助ヲ頼ム云々。

1055頁（11月24日）四両会ヲ余ノ舎宅ニ開ク、出席者永峯秀樹、宮川保全、岡敬孝、伊藤直温、三田佶、成瀬隆蔵、余ノ七名、欠席ハ江原、乙骨、山田先生、佐々木、瀬名、真野、石橋、新家ノ八君。此日会者ト共ニ唐紙ニ「寄セ書キ」ヲ為シ紀念トス。

1056頁（12月16日）孤松余影（二宮熊次郎伝）ヲ読了、氏ハ忘友中川将行君長女つる子ノ夫君ニシテ山県有朋公ノ所謂ル懐刀ナリトイフコトヲ聞ケリ、中川氏卒去ノ後聊カ嗣子哲氏ノ為メ尽力セシコトアル故ナラン、明治ノ初期永峯、中川、余ハ三家相隣リ、二階ノ壁ヲ除キ相通ジテ往来ス、永氏東、中氏中、余西ニアリ。地ハ有楽町一ノ三。明治十年前後数年間此長屋ニ借家セリ、現今有楽座ノ西方、浴場（其当時余等ノ常ニ入浴セシ銭湯ナリ）ノ北方ナル十数軒連リタル一棟長屋ナリ、此外ニモ数棟アリ、旧幕府ノ所謂ル南奉行ノ役所アリシ所、此長屋ハ奉行所ノ役員等ガ住宅ナリシナラン。（中略）二十五日静岡県田方郡長岡温泉行ノ途ニ就ク、（中略）沼津ノ香貫山ニ続ク鷲津山ヲ眺メ、明治初年沼津兵学校在学当時ヲ追憶ス、其当時城内ナル乙骨先生方ニ在塾、志下、香貫、静浦、江ノ浦、三島、原、吉原、愛鷹山ノ馬狩、鷲津山神、白糸ノ滝、修善寺温泉行、狩猟ナドノ事ヲ偲ビツツ、南条ニ着ク、（中略）（27日）田端温泉場ニアル加藤定吉中将ノ令弟故陸軍少将加藤泰久氏ノ空宅前ヲスギ、村井弦斎氏別荘及ビ其前ノ山茶荘ヲ見ル。

1061頁（大正7年1月1日）夜浅岡氏夫妻来話、令閨ハ故海軍大尉香山永隆氏ノ弟某ノ令嬢、香山氏ハ明治ノ初年兵学校ニテノ同僚、幕府人、下谷ニ住ハレ、上野戦争ノ時、其祖母君ハ雨傘下駄バキニテ逃避セシト、浅岡氏ハ伊予松山藩士、明治十何年度慶応義塾出身、海軍ニ入リ、英ノ「グリーンニチ」ニ在学ス、明治元年土州兵松山城ヲ占領シ主公ハ某寺ニ入リ謹慎セリナド、佐幕ノ為メ云々。

1063頁（1月4日）三島駅電車ニテ四時前沼津郵便局前下車、成績表等一切ヲ特別配達郵送ス、沼津本町ノ杉本旅館ニ泊ス、妻ヲ伴ヒ千本松原公園ヲ見ル、往時回想、感慨無量ナリ、魚町ノ醤油醸造箱根屋、和田昌吉氏ヲ訪フ、見性会員ノ道友ナリ。六日朝和田氏ヲ訪フ、馬車ニテ静浦見物、大風砂塵ヲマキ面ヲ向クベキ様モナシ、四十九年前亡兄溝口衛、同嫂つね子等ト寓居セシ志下村ノ名主「ナカンジョウ」テフ人ノ家アリヤト往来ノ一翁ニ問フ、彼曰ク「ナカンジョウ」ハ佐藤氏、此村ノ富豪ナリ、余曰ク五十年前、主人ハ五十才位、子息ハ二十才以上ノ立派ノ好男子ナリシガ如何セシカ、彼曰ク彼病気ニテ東京ノ病院ニ在リシガ近頃帰宅シ在リト、彼トハ其子息ノコトナリ、ヤガテ此翁ノ案内ニテ佐藤氏ヲ訪フ、嫁ラシキ四十前後ノ女ト六十前後ノ老女出ヅ、余ガ五十年前ニ兄ト共ニ厄介ニナリシ抔種々話セシガ初ノ疑惑ラシキ様子モ解ケテ微笑スルニ至ル、然レドモ病主人ニ面会セシムルニ至ラズ、急グママ名刺ヲ置キテ去ル、余等寓居セシ頃ハ富有ラシカラズ庭広キ茅屋田舎、十畳許ノ一室ニ余兄弟、嫂、乳母、姪ノ五人、同棲、佐藤ノ家族ハ裏室ニ在リ、土間広キ炊事場ニテ真ノ田舎家ナリシガ今ハ二階造瓦葺ノ建築ナリ、彼子息（徳―トイヒシ様ニ覚ユ）家ヲ興セシナラン、其当時、村内ノ学者トノ評判アリシ。附言「ナカンジョウ」ト云ヒシハ最初寓居セシ家ニテ其主人ハ頑丈ノ老人。後チ此佐藤方ニ移転セリ。「ナカンジョウ」トハ第二ノ家ナリシカ、先ノ翁ノ言ニ従ヘバ此佐藤氏ナリ、サラバ余ノ記憶ノ誤リカ、沼津ニ帰リ正見寺ニ故嫂つね子善明院殿ノ墓ニ詣デント、寺主ニ会ヒ、先年参詣ノ時名刺ヲ残シ無縁ニナラザラン事ヲ頼ミシ事ヲ話ス、彼レ忘レタル如ク、又先年ノ大火ニテ類焼シ墓地モ半バ道路ト化シ石塔ノ破壊ヤ道路改正ノ為メ遺骨ノ不明ナル者ハ一処ニ合葬シテ一石碑ヲ立テアリ。寺主和尚ト善明院殿ノ墓石ヲ探尋セシモ分ラズ、今更致シ方ナク回向料ヲ置キ今後知レタラバ知ラセヨトテ遺憾ナガラ去ル。又往時在住中、故吉田一郎氏ト共ニ寄宿セシ魚町ノ紙商小池屋モ其当時幼少ナリシ子息ノ代トナリ居レリ。急ギシ尽尋問セズ。駅附近ナル東照宮祠

ノ傍ニ立テル兵学校紀念碑ヲ妻ニ示ス、又旅舎杉本屋ノ隠居ハ兵学校時代ノ事ヲ知レリ、嘶サバヤト思ヒシモ帰途急ギユヘ果サズ。遂ニ帰宅。

1065頁（1月）二十七日三田佶氏方ニ四両会ニ出席。

1066頁（2月）二十二日徳川家達公茶話会御招待ノ席末ニ列ス、ヤベ某、平山成信、赤松則良、佐藤陸軍将官?、吉田某、植村澄三郎、余及ビ慶久公御臨席、吉田氏ノ南洋談アリ。

1068頁（3月21日）此数年間ノ学生教育ハ余ノ終生中意義アルモノ、真実ニ子弟ノ教育ハ私塾的ニアリ、官吏トシテノ教官モサルコトナガラ何トナク恩情足ラズ第一生徒トノ接触ナク、情味深カラズ、之ニ反シ私的教育ハ真ニ我子ヲ育ツル思ヒアリ、学生モ親シ、一種云フベカラザル暖カ味アリ、殊ニ奨学舎時代ハ妻ガ食事万般ヲ世話シ真ニ家族的ノ情味深シ、造士舎ニ移リテ炊事万般舎僕等之ヲ担任シ自ラ家族ト舎生トノ接触減少ス、故ニ人物養成ノ真目的ナラズ三、四人若クハ十人許ヲ限リ全ク家族的ニ訓育スルニ若カズ。今日造士舎ヲ去ルトキ何トナク後ロ髪ヲ引カルル思ヒアリ。今日ニテ世間奉仕ヲ終リ悠々余命ヲ送ラン、廿四日佐々木慎思朗氏宅ノ四両会ニ出席、江原、乙骨両先生七十七ノ賀寿祝福会ヲ催ス相談、発言者宮川君、佐々木、瀬名三人幹事タリ、

1070頁（四月）一日三浦太郎氏来訪、造士舎嘱託講師七君ヨリ余ガ退舎紀念ノ為メ茶器一揃ヒ恵贈。

1098頁（5月）十八日帰宅、十九日水交社ニ育英会総会ニ出席ス、徳川家達公総裁後初会ニシテ御訓辞、御話、総会了ル。

1099頁（6月5日）吉岡艮太夫伝ヲ恵贈之ヲ読ム、令息育氏ヨリ気附キノ点アラバ知ラセヨ又詩歌アラバ送レト、其一二五頁ニ城下ノ入口ニ聊カ胸壁云々トアリ該胸壁ハ重平ガ小隊長トシテ之ニ拠リ官軍ノ薩藩銃隊ヲ防ギ遂ニ宇都宮藩兵ト此薩軍エ挟撃セラレ敗退、徳次郎駅ニ走リシナリ、八日徳川家達公御相続五十年祝賀会ニ海軍水交社ニ参列ス、会費三円五十銭、旧臣三百人以上、平山成信君代表シテ祝辞ヲ呈シ、乃チ真情充溢ノ御答辞アリ、慶久公御夫婦モ列席セラル、余興ハ活動写真ナリ。

1106頁（8月）十九日沼津兵学校以来ノ学友親朋真野肇氏病死ス。去月初旬同氏ヲ訪ヒシ時別ニ異状モナカリシガ惜ムベシ、行年七十七才、四両会員中ノ最老人ヲ失フ、追々オ鉢ガ廻リ来ラン。

1107頁（9月29日）第四十一回四両会ニ出席、幹事成瀬隆蔵氏方、

1110頁（11月）一日加藤定吉君海軍大将ニ昇進ノ祝宴ヲ精養軒ニ開カル、君ハ余ノ兄重豊ノ本所邸内ニ居住セラレタル平山氏ノ甥ニシテ少年ヨリ之ヲ知ル、且ツ余ガ兵学校ニテノ教エ子ナリシ、縁故殊ニ深シ、旧幕臣ニシテ戦功、男爵ヲ授ケラレ、大将トナリシ者、君一人ノミ、実ハ情ナク思ヒ居リシニ少ク溜飲ヲ下グ。（中略）本月ハ伊藤直温令息主計少佐河内艦爆発殉死、之ヲ弔フ。

1112頁（十二月）一日葵会ニテ徳川公ヲ偕行社ニ御招待申上グ、（中略）四日赤松中将御病気ヲ中野ノ御住所ニ訪フ、喜バル。菓子ヲ呈ス。

第十二冊

1124頁（大正8年5月25日）四両会開催、岡敬孝氏ニ会合。

1126頁（6月）七日静岡育英会第二十八回総会ニ出席ス、（中略）八日重秀男大太郎、島崎仁作氏女徳子結婚挙式、披露会ニ水交社ニ参列。婚方ハ重秀、いは、伯母松子、伯父重平、伯母やへ、伯父調所恒徳、伯母越路子、叔母福原やす、妹渡辺ひで。嫁方、父島崎仁作、叔父渡辺直也、伯父松原安彦、叔父小長井潔、叔母同梅子、姉大嶽喜満子、親戚渡辺佳彦、同影山滋樹。媒酌人佐伯美津留、同夫人。

1133頁（10月）十日小花万次氏ヲ訪フ、脳裏ニ変異ヲ生ジ錯覚、人事ヲ解セズ、

1144頁（12月13日）旧友永井当昌死。十四日育英会学生奨励会第一回ニ出席ス。徳川公邸内日香園ニテ開催、会長井口省吾大将ノ講話、茶菓、琵琶曲ノ余興、盛会終ル。

1145頁（大正9年1月）廿日余ガ予テ望ム旅行的四両会ヲ開催セン為メニ先ヅ其準備トシテ伊豆長岡温泉共栄社ニ来ル、（中略）二十三日四両会友宮川保全、伊藤直温両氏来会、宮川氏ハ三号室、伊藤氏ハ二号室、余ハ既ニ一号室ヲ占ム、一号ハ十畳、二号八畳、三号十畳、共ニ楼上。二十四日永峯、佐々木、三田三君来会、即チ四両会ヲ開ク、余ハ幹事トシテ周旋ス、終日快談、論難、囲棋ナド同窓ノ友情横溢、各自互ヒニ悪口ヲ言ヒ、其僻ヲ拾ヒ、挙足取リ上手ノ永峯、辞令ニ巧妙ナル三田、殆ンド金聾ノ伊藤、若返リノ宮川老、十文字氏ノ自強術宣伝的ニ「ドタバタ」ト柔軟体操式ヲ行フニヤ〳〵笑ヒテ楽シソウナル佐々木、周旋下手ナル荒川、夜半過ギ寝ニ就ク、佐々木氏曰ク僕ノ鼾声雷ノ如シ、故ニ独寝ヲ望ムト、余答フ伊藤君ナラ差支ヘナシトテ二号室ニ同寝ス、大笑ヒ。二十五日六人同行ニテ三津浜ニ向フ、松濤館ニテ昼食ス、鮮魚料理美味、往路徒歩途中談話ニ花咲キ、元気ハ好シ、知ラズ〳〵行キ着ク、宮川、永峯、三田兄ハ囲棋ニ没頭ス、館主ノ懇望ニヨリ三田氏先ツ揮毫ス詩曰ク「同是嘉安以上人、駿東校衰旧精神――蓼堂。「○何之以智仁勇　松軒翁（永峯）」「看風使帆　江東漁夫（荒川）」三田氏ト余ハ人車ニテ帰ル、夜ハ又盛ンニ議論ヲ闘シ又烏鷺ノ争ヒニテ夜半就床、二十六日散会、永峯、三田二君、余ノ三人ハ吉奈温泉ニ向フ、（中略）二十七日朝自動車至ラズ午后出発、帰宅ス、

1148頁（2月28日）徳川家達公ヨリ茶話会御招待ヲ蒙ル、年齢順ニ名簿ニ記名セヨトテ、荒川重平、中西某陸軍少将、元鉄道院副総裁古川阪次郎、元長崎県知事、貴族院議員荒川義太郎、海軍大将加藤定吉、海軍少将山口鋭、大学教授博士神保小虎、海軍少将中島資朋、大学教授博士立作太郎。立氏ノ欧州平和会議ニ関スル講話ヲ聞ク、階下食堂ニテ丁重ノ洋食ヲ賜ハル。山ノ手電車ニテ帰宅。

1149頁（3月）十六日成沢知行氏ヲ訪ヒ四両会ニ入会ヲ勧ム、快諾。（中略）二十六日岡崎壮太郎先生ニ入門ス、乙骨先生ノ紹介ニヨル、正式ニ作詩ヲ始ム。二十八日鎌倉小町ナル三田佶氏別邸ニテ四両会開催、会者佐々木慎思朗、宮川保全、瀬名義利、岡敬孝、新家孝正、新入成沢知行、客員愛知信元、主人、余ノ九人、相変ラズ饗応丁重、（中略）（30日）小花万次氏告別式。

1152頁（5月）七日伏見宮博義王殿下御婚礼御披露夜会ニ召サレ、拝参。（中略）二十三日四両会ニ出席、佐々木氏幹事、永楽町一ノ五、銀行倶楽部楼上純日本式ノ室ヲ借用セラル、優雅洒々タル大小二室。会議室ニハ渋沢、豊川二氏ノ肖像ヲ掲グ。

1158頁（9月8日）藤沢駅ニ遊行寺ニ参詣、十五間許四方ノ本堂、庫裏、長廊下、方丈等、広大ナリ、五十年前沼津ヨリ出京ノ際、永峯秀樹、中川将行氏ト同行、此駅ニ宿泊セリ懐旧追憶ス、（17日）千駄ケ谷公爵邸ノ東照宮御木像ヲ奉拝ス、公御夫婦令嬢方ニ御挨拶申上ゲ、旧友ト話シ模擬店ニテ萩ノ餅すし抔ヲ拝味シ、退去。帰途、育英会新築寄宿舎明徳寮ヲ見ル。（中略）廿七日赤松則良男爵薨去、駒込吉祥寺ニ会葬ス。（10月）本月ハ明徳寮開寮式。

1160頁（11月）七日静岡県及旧幕出身学生大会ニ徳川邸日香園ニ出席ス、学生三百数十人、会員七十人、総裁徳川家達公、会長平山成信氏、学生等ノ演説、茶菓ヲ供ス、盛会。

1161頁（11月）二十一日葵会ニ九段坂上富士見軒ニ出席、徳川両公ヲ御招待、慶久公ハ御風気欠席。会長江原素六氏謝辞、公爵御挨拶、大森鐘一男演説、四、五人ノ五分演話、来年ヨリ田安、一ツ橋両家ヲモ御招待ニ決ス。男爵厚様ヲ亦ト山内長人男ノ発議アリ、賛成。後来ハ子孫ヲモ同道、該会ヲ永久的ナラシメントス。又国勢調査的ニ会員ノ年齢ヲ調査セシニ、八十才以上ナク、江原氏七十九才、七十以上十人、重平モ其中ニアリ、六十以上七十以下、五十以上六十以下、四十以上五十以下、各々三十一人ハ奇ナリ。三十以下ハ唯一人ニテ陸軍士官某氏ノミ。

1164頁（大正10年1月）廿三日四両会ニ出席、成瀬氏幹事宅ニ会者三田佶、

宮川保全、永峯、瀬名、新家、成沢、荒川ナリ

1166頁（3月）二十七日伊藤直温氏幹事四両会ニ出席者六人、永峯氏約シテ来ラズ、忘レタルナラン。

1172頁（十月）八日徳川家達公渡米華府軍縮会議全権委員并ニ令嗣外務書記官家正氏ノ送別会ニ一ツ橋外如水館ニ出席、会者四百余人、会長江原素六翁ノ送辞、公ノ御答辞、某氏ノ祝辞、本田晋翁ノ警語、某氏ノ祝詩、余興ニ手品、講談等アリ、各自満足ノ色堂ニ溢ル、会者ハ葵会、同方会、育英会、旧交会ノ同人ナリ。十三日維新前後ノ俊才、故阿部潜初名邦之助君ノ追弔会ヲ築地精養軒ニ挙行ス、江原素六、山田昌邦先生等発起人、余モ亦其中ニ在リ、阿部寿、岡田平太、永峯秀樹、十六人相会ス、伯鶴ノ相撲講談面白ク、石橋絢彦氏ノ話、江原氏ノ阿部君ノ談、懐旧話頭、追想裏ニ散会。

1174頁（11月）二十七日上野精養軒ナル四両会第五十六回ニ出席、新家孝正氏幹事ナリ、神保小虎氏臨時出席セラレ鉱物ニ付キ講話。出席者ハ永峯、岡、三田、宮川、伊藤、成瀬、成沢、主人、江原先生、予ノ十一人。

1178頁（大正11年1月）廿一日徳川慶久公脳溢血ニテ突然薨去ノ由、大ニ驚キ参邸ス、

1180頁（3月）二十三日真野文二博士還暦祝賀会ニ自署名刺并ニ賀詩「童顔鶴髪映華筵、祝賀蓬莱不老仙、想見福陵園圃裏、奇葩異木競清妍」ヲ贈ル。二十六日四両会ニ出席、幹事ハ永峰秀樹氏、会者成瀬隆蔵、成沢知行、岡敬孝、三田佶、伊藤直温及余ノ七人。

1182頁（4月）陸軍少将瀬名義利死、告別。

1183頁（5月）二十日江原素六翁脳溢血危篤ノ由新聞紙ニ見ユ、直チニ見舞ヒシニ昨夜既ニ永眠未発喪。余ノ恩人ナリ、屍体ヲ拝ス、温顔不異平生、唯無生色耳、拝辞去、来ル廿八日余ノ四両会ニ御招キノ書ヲ記ルシ置キシナリ、嗚呼。翁歳八十一才、貴族院議員、麻布中学校創立校長、葵会々長、翁ハ旧幕人、余十六才ノ時慶応三年歩兵差図役並勤方（今ノ少尉ニ当ル）ニテ翁ハ中隊長タリ、共ニ京師ニ出張、警衛、徳川慶喜将軍御在京、屢々御仮寓桑名邸ニ参警セリ、其冬十二月余ハ交代ノ兵ヲ得、軍艦盤龍丸ニ乗リテ江戸ニ帰ル、翁ハ砲兵科ニ転ジ京都ニ残ラル、鳥羽伏見ノ後ニ出デ尋イデ下総ニ脱走シ官軍ト戦ヒ、官兵ト組打、組伏セラレ危急ノ際下士古川僕郎来援、官兵ヲ殪シテ救ハル、古川ハ後ノ将軍宣誉氏ナリ、後チ沼津兵学校設立ニ尽力ス、当時ハ静岡藩権参事、後沼津中学校長、出京後政友会ニ尽力、麻布中学校ヲ創立、衆議院議員ヨリ貴族院議員ニ勅選セラル、邪蘇教信者、教育界ノ元老トシテ各地ノ演説会教育会ニ努力奔走、席暖マルニ暇ナク然モ壮者ヲ凌グ有様ナリシガ本月十七日修学旅行ニ箱根地方ニ赴キ生徒ト共ニ徒歩、帰京後中学校々長会議ニ出席、他ノ演説ニモ従事セラル、遂ニ脳溢血ニテ十九日夜逝去セラレタリ、哀哉、遺骸ハ沼津ニ葬ル。廿二日江原翁告別式ヲ神田青年会館ニ行ハル、之ニ参ス、会者数千人、非常ノ混雑、翁ノ徳望ノ偉大ナルヲ証セリ。（中略）廿八日四両会第五十九回、余幹事タリ、王子ノ扇屋ニ開ク、昔時幽静ノ閑地モ今ハ電車其門前ニ通ジ汽車ハ附近ヲ通過シ、轟々タル響音ヲ聳セシム、場所ノ撰定不可ナリキ、会者石橋絢彦、永峰秀樹、三田佶、佐々木慎思朗、伊藤直温、岡敬孝、新家孝正、成沢知行、余ノ九人。欠席ハ山田昌邦先生、宮川保全氏ハ腎臓炎、久ク就寝、成瀬隆蔵、乙骨先生ハ御老病。

1185頁（6月）十日静岡県及旧幕府出身学生会ニ徳川公邸日香園ニ出席、（中略）二十一日小柳津要人死七十九才、氏ハ余ガ沼津在学ノ時乙骨太郎乙先生方ニ同塾生タリ、田口卯吉、堀田徳次郎モ在リ、今ヤ余ノミ生存、又乙骨先生モ昨今容体重シ。

1187頁（7月）十八日今朝乙骨太郎乙先生逝去、余ガ明治初年沼津兵学校資業生タリシ時先生ノ家ニ寓シ英文教授ヲ受ク、四年海軍志願ニテ永峯秀樹、中川将行、矢吹秀一、吉田一郎ト共ニ出京ス、赤松則良先生（当時海軍大丞、後中将、男爵）ノ推挙ニテ永峯、中川、余三人ハ兵学校教

官トナル、爾来五十年余、乙骨先生ノ御恩ハ心胆ニ銘シテ忘レズ、常ニ伺候セリ、先生亦ヨク余ヲ厚遇セラル、今ヤ幽明界ヲ異ニス、行年八十歳ニ渉セラル。

1189頁（九月）三日育英会ニ出席、財団法人トナリタル結果、役員撰挙、理事ハ県人六名旧幕人六名トス。平山成信氏会長ニ笠井信一氏副会長等定ル。七日余ハ育英会評議員ニ推挙セラル。十日房州船形町大森邸内ニ新築ノ余ガ家、無息庵殆ンド落成ストノ通知。（中略）二十四日四両会ニ三田佶氏邸ニ会ス。（中略）（10月20日？）江原素六先生伝記編纂会ノ依頼ニヨリ妻やへヲシテ余ガ口授ヲ筆記セシメテ其委員ニ送附ス。

1191頁（11月21日）昨日工学博士新家孝正氏死去、氏ハ四両会員ノ最若年ナリ、余ハ助カリ彼ハ突然他界、惜ムベシ。余ハ病後告別式ニ往ケズ、弔詞ヲ送ル。又成瀬隆蔵氏ヨリ宮川保全氏病、危篤ノ由、通知、やへヲシテ訪問セシム、昨夜既ニ卒去セリト、四両会員二人同日死去トハ何タル悲哀事ナルカ。

1195頁（大正12年）（二月）六日散歩、那古寺東側山麓山内長人男ノ別荘、其隣家ハ斎藤金平氏宅前ヲ過グ

1196頁（3月）二十五日伊藤直温氏宅開催四両会ニ出席、成瀬隆蔵氏、余、主人ノ三人ノミ甚ダ寂寥ヲ感ズ、（中略）（29日）余ハ島田三郎氏ノ病気ヲ見舞ヒ令息ニ面会、父君ハ脳ニ故障、面会謝絶ト。

1199頁（5月）二十七日成瀬隆蔵氏会幹四両会ニ出席、第六十四回、臨時出席愛知信元氏等七人。

1200頁（6月3日）育英会学生第七大会ニ出席ス、学生ノ演説、余興ニハ伯知ノ講談アリ、（中略）二十四日徳川慶久公襲爵御披露招待ニ拝参、園遊会開催、参賀者旧臣千人以上、司法大臣岡野敬二郎氏来客惣代謝辞ヲ呈ス、興山公（慶喜公）ノ遺墨、東照公遺訓（人ノ一生――）并ニ菓子ヲ賜フ。

1202頁（8月）此月廿四日加藤友三郎首相薨去ス、広島ノ人、兵学校生徒時代ハ平凡ノ観アリ、（9月1日）大震動、立歩シ能ハズ倒ル（中略）（4日）鮮人暴動ニ戒厳令ヲ布カレ、鮮人ハ切捨テ御免トイヒ、真相不明、飛語巷説、（中略）（5日）同氏ノ談ニ曰ク東京ハ地震ヨリ火災甚シク、鮮人ノ放火、下町一体惨状、激甚、隨テ品物掠奪盛ンニ行ハル、途中東京深川ヨリノ避難民ニ逢フ、此人モ某倉庫ヲ破リ罐詰ヲ掠奪セル連中？ナリシカ、二三ノ罐詰ヲ携持、其子ノ手ヲ挽キ来レリ――

1212頁（9月13日）親友佐々木慎思朗氏ハ茅ヶ崎別荘ノ二階ニテ当時昼食最中圧死セリト、又十一日ニハ最旧友三田佶氏、鎌倉別荘ニ於テ丹毒ノ為メ病死ス、地震ニハ家屋倒壊、辛フジテ救助セラレシガ病ノタメ遂ニ起タズ、又岡敬孝氏ノ実弟ハ一家二十余人？本所被服廠跡ニテ焼死ス、又平岡道生氏ノ親類ハ被服廠跡ニ避難セントセシガ余リ多数ノ荷物ヲ見テ其発火ニ気遣ヒ上野山内ニ避ケテ難ヲ免ルト等悲惨言語道断。（中略）十八日永峰秀樹氏ノ兄ノ三男ハ房州ニテ負傷、成瀬隆蔵氏ノ孫ハ鎌倉ニテ惨死。（中略）朝鮮人ノ暴動ノ如キハ唯風聞ニ過キザルノミ、何者ノ悪戯カ此風説ヲ散布シ為メニセシ乎、

1215頁（10月2日）帰途本郷弓町ナル佐々木勇之助氏方ニ故令兄慎思朗君ノ家族ニ弔問セシガ東中野ナル勇之助氏別荘ニ移居ストイフ。（中略）四日故三田佶氏ノ未亡人ニ往弔ス、景福院殿蓼西日正居士霊前ニ焼香ス、其懐旧談ニ暗涙ヲ催ス、（中略）二十五日故佐々木慎思朗氏ノ告別式ニ谷中祭場ニ列ス。

1217頁（11月）十四日今暁島田三郎君逝去、氏ハ沼津兵学校ニテ余ト同窓ノ友タリ、元老院書記官ヨリ衆議院最初ノ議員トシテ引続キ、剛直ト能弁ヲ以テ鳴ル、毎日新聞社々長、衆議院議長トナル、一回普通撰挙主唱者ノ一人、星亨氏ヲ筆責余サズ、伊庭惣太郎ガ星氏ヲ刺殺セルモ其因ヲナセシナラン。三郎ハシヤベラウ、能弁ノ諧語トスルニ至ル。

1218頁（11月）二十五日地微震、四両会ニ岡氏方ニ出席、永峯、伊藤、成瀬、主人、余ノ五人ノミ淋シ、

第十三冊

1226頁（大正13年3月）二十三日四両会ニ永峰氏宅ニ参会。

1229頁（5月）二十五日四両会幹事水野勝興氏宅ニテ開会、出席、入会以来初度参邸、栃内家ノ北方ナル向側ナリ。

1233頁（8月）三十一日京都ノ城南会ヨリ謝辞アリ、伏見鳥羽ノ役東軍戦没者殉難記念碑及墓標保存維持ニ寄附金セシ故ナリ、

1235頁（9月）廿八日四両会第六十九回ヲ栃内氏宅ニ開ク、会員九人ノ中、永峯、伊藤、成瀬、岡、水野、余ノ六人、欠席ハ山田昌邦先生、眼病夜行不可能ノ石橋絢彦、出疹ノ為メ成沢知行、諸君ナリ、栃内氏モ晩食連ニ入リ快談、唯岡氏ハ身体大ニ衰ヘ夜行ヲ恐ルトテ中座。又永峰令嬢池辺きん子ハ江田島在住時やへ、志げノ親旧友ナレバ其来訪ヲ乞ヒ三女ハ別ニ晩餐ヲ共ニシ、懐旧談、此日ノ会ハ誠ニ愉快ナリシ、特ニ栃内氏ニ謝ス。

1237頁（10月）二十六日上野寛永寺ニ至リ同方、碧血合併秋季大会ニ出席、故慶喜公御謹慎屏居中ノ大慈院ノ御居室ヲ拝見、八畳敷?二間続キノ狭室、御自筆ノ掛ケ軸ヲ見、闇涙ヲ催ス、（中略）原胤雄海軍中佐ノ北清挙匪戦役ノ時、北京籠城苦戦ノ実験談ハ興味津々タリ、

1240頁（11月）二十三日相州葉山ノ石橋絢彦君宅開催ノ四両会ニ出席、会者ハ伊藤直温氏、余ノミ、主客三人、甚タ寂寥、主人宅ハ御用邸前、字一色ノ丘上、松林蓊蔚、瀟洒タル家、北ハ山ヲ負ヒ南ハ海岸ニ近ク風光頗ル佳、主人夫婦ノ歓待ヲ受ケ、午餐後主人案内、海岸ニ出デ御用邸一部ノ開放セラレタル御園ヲ拝観シ海ニ突出セル小岬内ノ茅葺御茶屋ヲ窺ヒ、四方ノ風光ヲ覧賞シ辞去、

1244頁（大正14年1月22日）第六天町徳川慶久公邸ニ参シ、故慶久命ノ三周忌御祭典ニ列ス、御親族初メ旧臣特別ノ者、総人数五十名許、荘重ノ神式祭典、祭文ハ厳カニ読マル、感慨深シ。

1245頁（2月）八日伊藤直温氏宅ノ四両会ニ出席、岡敬孝、永峰秀樹両氏、余、主人ノ四名ノミ、

1248頁（3月）二十二日成瀬隆蔵君宅開催四両会ニ出席、支那人物ノ評論頗ル面白ク、曽国藩、楊、墨―。愛知信元君臨時出席、成瀬氏六男某写真撮影シ給ハル。「二目夾ミ」五目並ベノ戯棋頗ル興味アリ。

1253頁（5月）二十四日四両会幹事岡敬孝氏宅ニ出席、成瀬隆蔵、伊藤直温、及主人ト四人ノミ、成瀬氏用事アリ中座。

1253頁（9月）二十七日四両会幹事成沢知行君宅ニ会ス、出席ハ伊藤直温、成瀬隆蔵、二氏ト予、三人、晩餐洋品五。

1263頁（11月21日）目賀田種太郎男数年振リニ自動車ニテ来訪、余ノ病気見舞、且ツ新村出ノ出京期ヲ問ハル、男ハ故勝伯ノ婿、同伯ノ書類ヲ京都帝国博物館ニ納メ、伯ノ正伝記ヲ新村ニ託シ、伯ノ真髄ヲ編纂セシメントノ意味ナル由、新村ハ同館長ヲ兼ネ居レバナリ、

1267頁（大正15年）（二月）四日愛知信元氏ト本郷座初日看劇、（中略）廿三日今夜ノラヂオ放送ノ中チ丸山亀吉氏ガ、内地人ガ鮮人ヲ軽蔑セル実例ヲ引キ、又列車内ニテ内地ノ小児ガ台湾人ヲ軽ンジ生意気ノ「チヤン〳〵」ト言フシテ聞キシ時、実ニ穴ニモ入リ度キ思ヒ汗顔云々ト、誠ニ患フベキコト、心セヨ同胞、

1270頁（3月）廿八日自宅ニテ四両会ヲ開ク、永峯秀樹、成沢知行、成瀬隆蔵、伊藤直温ノ四君、来会、囲棋例ノ如シ、

1272頁（4月）二十三日愛知信元氏ト神田劇場ニ行ク、（中略）（5月5日）市村座ノ看劇、同行者愛知信元、

1280頁（9月）六日目賀田種太郎男ノ糖尿病気ヲ見舞フ、男ハ八月十二日以来身体不如意、肺炎症重ク、意識不明。聴視官ハ鋭敏、在官中ノ事ヲ低声喃々スト、令閨ハ勝海舟ノ令嬢ニシテ女丈夫。同君ハ余ガ最古ノ旧友ナリ、旧幕時代漢学先生内山孝之助氏ノ同門弟ニテ素読吟味（試験ノコト）ノ練習ヲ共ニシ聖堂ニ於テ四書五経ノ試業ヲ受ケ共ニ甲科及第、丹後縞三反拝領ス、（中略）十一日目賀田氏ニ通夜ス、故三田佶君モ聖

堂ニテ同吟味ヲ共ニセリ、爾来六十年、今ヤ両氏ト幽冥界ヲ異ニス。（中略）（10月）二日静寛院宮五十年、九月二日薨去、御法要ニ同奉賛会々員トシテ増上寺ニ参拝ス。宮ハ孝明天皇御妹君、徳川十四代将軍昭徳院殿エ御降嫁、淑徳高ク貞烈無比。徳川家存続ニハ功績潜在多大ナリシト云フ、余ハ幕臣少年、家茂公ヲ吹上御庭上ニ遥謁セリ、蓋シ歩兵隊練習上覧ノ際、余ハ講武所幼年隊トシテ其隊中ニ在リシ、本日ハ先ヅ御廟所ニ参詣ス。

1284頁（10月15日）海舟翁ノ墓ニ詣ス、先年両三回、故目賀田氏ト洗足会員トシテ参詣セリ、方今ハ某会設立セラレ、墓側ニ外苑ヲ設置シ、旧勝伯ノ庵室ヲ爰ニ移シ、又広キ邸地内ニ同会事務所設立ス、其会長ハ平山成信氏、墓前ニ在ル洗手石鉢面ナル寄附者ノ名ノ中ニ余ノ名彫マル、（中略）十七日明徳寮第六回開寮紀念日挙式ニ出席、静岡育英会附属ノ生徒寮舎ナリ、同会ハ明治十八年ノ創立、余等之ヲ主唱シ旧幕人ノ子弟ノ補助、学資支給ヲ目的トス、赤松則良中将ヲ会長トシ次ニ榎本武揚子ヲ推ス、後余ガ主唱セル静岡県人及旧幕臣――ノ改革案ノ意見貫徹シ、方今ノ同会トナリ同県ヨリ毎年一万円ノ寄附ヲ受ケ、総裁ニハ徳川家達公ヲ、会長ニハ平山成信氏ヲ推選セリ、後此寮舎ヲ新設シ県人子弟等ノ便利多大ナリ。宴会終リ一同「テーブルスピーチ」等アリ。

1286頁（11月）二日四両会員水野勝興氏病死、愛宕下青松寺ノ告別式ニ参拝ス。（7日）旧幕臣子弟并静岡県出身学生大会アリ、臨席ス、学生百人許、育英会総裁及ビ会員七八名参列、某氏ノ講演、学生ノ卓上演説、其落語ナド面白シ。八日愛知信元氏ト浅草公園松竹座ニ観劇セントス、（中略）十四日故山田昌邦先生葬式ニ三田台裏町薬王寺ニ参会ス、先生ハ旧沼津兵学校ノ教授、今ハ製綱会社々長タリ。（中略）廿一日四両会幹事成瀬隆蔵君宅ニ参会。

1292頁（昭和2年3月）二十七日四両会幹事永峰秀樹氏ニ行ク、会者伊藤直温、成沢知行、成瀬隆蔵、余ナリ。

1296頁（5月）二十一日旧友岡敬孝氏病死八十二才、令嗣喜七郎ニ弔詞。

1303頁（9月）三日加藤定吉海軍大将突如薨去、動脈硬化ト云フ、氏ハ旧幕府人、余ガ兄ノ邸内ニ住居セル平山氏ノ甥、且ツ沼津兵学校ノ後進生ニシテ余ガ受持生徒ナリシ故ニ殊ニ別懇ノ間柄、又幕府人ノ大将トナリシハ氏一人ノミ。

1310頁（11月）三日第一回明治節。国民ノ希望ヲ代表シ、帝国議会ノ請願ニ原キ明治大帝ノ旧天長節日ヲ以テ三大節ニ加ヘラレタリ、余ハ幕末ニ生レ戦乱紛擾ヲ経、明治ノ大発展、二大戦捷、世界大戦ヲ過ギ科学ノ進歩諸発明、航空、ラヂオ等ノ驚嘆スベキ事物ヲ目撃、体験シ、本年喜寿ノ齢ニ達シ実ニ幸福ノ身、難有キ極ミナリ。

1312頁（12月3日）此日余莫逆益友六十年来ノ知己永峰秀樹翁死、氏漢英学ニ通ジ訳書暴夜物語、ギゾー文明史、性相学原論等、著書「人ト日本人」アリ、性剛直、読書最愛菅子、兵学校ニテハ教官トシテ明治四年ヨリ三十五年ニ至ル。（中略）六日永峰春樹氏ヨリ父君病死ノ状況通知、三日急病、附近ノ竹内中将夫人有楽子スラ間ニ合ハズトイフ、旧沼津兵学校資業生ノ同級生、永峯、中川将行、矢吹秀一、吉田一郎、余ノ五人、同志、生徒ヲ辞シ明治四年海軍修行ノ為メ出京シ、永峯、中川、余三人ハ海軍ニ入リ、矢吹ハ陸軍ニ入リ男爵中将ニテ薨ス、吉田ハ肺病早世ス、中川ハ海軍技師ノ時疫死ス、永峯、余二人、兵学教官タリ。氏人ニ嫌悪セラル、此欠点ハ氏自ラ之ヲ知ル、余ハ之レニ反ス、氏曰ク荒川君ハ随分激烈論ナドスレドモ人ニ愛セラル、不可思議ニ思ヒ居リシガ性相学上其骨相ヲ視、其相ヲ発見、氷解セリ云々、氏本年八十才、余ニ長ズル三年、老ヒテ益々精励、専ラ漢籍ヲ好ム、囲棋三昧、徹夜シテ倦マズ、一種ノ哲学者トイフベシ、余ハ京都ノ菓子ヲ氏ニ送ラントテ本日外出ヲ期シ居リシニ栃内ヨリ急報訃音ニ接シ落胆ス

1315頁（昭和3年1月）廿八日四両会員伊藤直温氏死ス、齢八十一、沼津以来ノ旧友ナリ。

1316頁（2月）十六日我国最初ノ普通選挙、議員候補者ノ宣伝「ポスター」ハ辻々、町々、家々、垣々、帖ラレモ帖ラレタリ、鈴ナリノ光景、新聞紙ハ選挙記事ニ殆ンド其紙面ヲ埋ム

1318頁（3月）二十二日日本数学物理学会創立五十年総会開催、余ハ其創立以来ノ社員ナリ、招待セラル、遠路不参。

1320頁（5月）二十六日徳川家達公ノ御請求ニ対シ拙詩二首、一ハ月夜雪、一ハ掃雪ノ五絶ヲ揮毫、同方会幹事中沢金次郎氏ニ郵送ス、

1321頁（六月）一日自叙伝ヲ再記シ始ム、

第十四冊

1329頁（昭和3年9月）二十八日中秋佳節、秩父宮擁仁親王、松平勢津子姫御成婚。節ヲ勢津ト改メラル、姫ハ旧会津藩主松平容保氏ノ孫女、当主保男子令弟恒雄氏ノ女ナリ、（中略）余ハ幕臣、感殊ニ深シ、第二皇子高松宮妃ト内定アリタルハ徳川慶光公ノ姉喜久子姫ナリ、徳川一門ノ繁栄、目出度キ限リニコソ、此ハ遠ク水戸義公以来勤王ノ結果ト思ハル、因果律然タリ。

1335頁（昭和4年2月5日）兄重豊逝去セラル、（中略）十二日芝白金丹波町源昌寺ニ葬式執行

1336頁（4月）三日海軍兵学校参考館委員伊藤義雄少佐、伊集院少佐ノ紹介ニテ来訪、兵学校記事第一冊（珍本）及ビ第一回生徒伊月一郎（後改江戸）以下数年間生徒出入表（是亦珍本）及明治五年海軍省官員録（兵学校ニテ其写本ヲ作リ余ニ送ル約束）、右三冊ヲ兵学校ニ贈呈セリ。（中略）伊藤氏非常ニ喜バル。

1351頁（10月）三十日育英会々長ニ岡田良平、副会長ニ山崎覚次郎、同山口勝三氏嘱託セラル。

1353頁（11月）十九日旧友四両会員成沢知行氏死亡ノ訃ニ接ス。

1355頁（昭和5年1月）廿三日徳川慶光公ヨリ高松宮宣仁親王殿下ト公姉上喜久子姫ノ御結婚御披露ノ為メ来ル三十一日華族会館ヘ御招待状ヲ辱フス

1359頁（4月）十七日徳川慶久公邸ニ参シ、高松宮同妃殿下喜久子姫御渡欧ノ御首途ヲ奉祝ス、

1373頁（昭和6年1月）三十日嫡孫銕太郎生ル、孫女一人ノミニテ心細カリシガ世嗣ヲ得テ安心体胖ナリ

1382頁（6月）十五日造士舎ニ出席、其存廃ニ関シ意見ヲ申出ヅ、存続ニ決ス、（中略）三十日海軍名誉教授ノ件ニ付栃内大将ヨリ左掲ノ如キ書状来ル、（中略）海軍教授ヲ勅任ニマデ漕キ附ケタル迄ノ予ノ努力及ビ当局殊ニ伊地知彦次郎中将、阪元俊篤男中将ノ周旋其功ヲ奏シタルナリ、予ハ第一ニ初任ノ命ヲ忝フシ、辞職シタリ、後チ芦野、保坂氏モ勅任トナリ五ケ年以上在職セシ為メ今回ノ恩命ヲ拝受シタルナリ、凡ソ事物ハ最初唱首ノ人ハ努力ニ酬ヒラレズ後人其恵ヲ受クルモノナリ、明治維新ニシテモ先人ノ努力ニ多大ナレドモ其人ハ多ク不幸ニ終リ第二流ノ人物其幸ヲ得ルモノ多シ、明治政府ノ顕官等ニ徴シテモ明カナリ、（7月1日重秀死亡、4日）予等四人兄弟其中三人已ニ逝キ、予独リ残ル、一昨年ハ兄上八十一才ニテ逝カレ今又弟七十三才ニテ死ス、老ヒテ骨肉ヲ失フ、世ノ味気ナキ哀レノ極ミナリ、予ノ長生ハ人ノ羨ム所ナレドモ一方ニハ悲哀多キモノナリ。

1401頁（昭和7年3月）廿八日千葉県ヨリ飛行機一台献納ノ資金募集アリ之ニ応ズ

1402頁（5月15日）所謂ル五、一五事件是レナリ。高橋蔵相、首相ヲ兼ヌ。凶徒ハ海陸軍尉官ト少尉候補生ナリ、

1405頁（10月）二十五日工学博士石橋絢彦氏病没、令息栄達氏ヨリ訃報、四両会員十五人中残者ハ唯成瀬隆蔵氏ト予ノ二人ノミ、石橋氏ハ明治元年沼津兵学校創立以来同窓ノ友、後四両会設置、時々会合、其楽ミ極メテ深シ、今ヤ淋シキ哉、氏ハ工科大学出身、日本灯台創建ニ従事、好学

ノ紳士。予ヨリ二歳若シ。

1408頁（11月）廿六日徳川家達公古稀且ツ金婚期并ニ令孫家秀君成年ニ達セラルルト、即チ同志者相計リ上野精養軒ニ同公御夫婦招請会ヲ開ク、之ニ出席ス、（中略）葵会、育英会、静陵会、某会ノ四団体ノ総代石渡敏一氏歓迎辞ニ対セラレ御謝辞、次ニ食堂ニ入ル、予ガ高齢ナル故カ公爵家ト同卓ノ栄ヲ辱フス、隣席ニ故大久保一翁氏ノ令嗣子爵立氏アリ、御迎辞ヲ呈ス、公ハ頗ル打チ解ケタル謝辞ヲ仰セラレ、其中ノ語ニ一翁氏ニハ予家ノ為メ尽力少カラズ大ヒニ謝スルトコロ、又金剛式ニハ云々ト申サルル通リ良ク接生シテ其節ハ今日ヨリモット御馳走シ賜ハレ云々、此時会集大歓喜拍手夥シ、次ニ予ハ立ツテ私ハ荒川重平ト申マス八十二才、此会衆中最長齢故万歳寿シ奉シトノ事ニ付僭越ナガラ発声致シマス御同唱願ヒマス、挙杯、徳川公爵同令夫人ノ御健康御長寿ヲ祝シ上ケマス、万歳―万歳―万歳、光栄身ニ余リタリ、

1409頁（昭和8年1月）二十四日木村浩吉少将ヨリ兵学校沿革ノ条々質問シ来ル、之ニ答書ス。

1411頁（3月17日）竹内有楽子病没、海軍中将重利氏令閨。予旧友永峯秀樹氏ノ二女、其生誕当時ハ中川将行氏予トノ三人ハ数寄屋橋内有楽町ノ貸長屋、三軒ニ相隣リテ居住シ共ニ兵学校ニ通勤、二階ヲ相通ジテ一家ノ如クニシ、学事相励ミタリ、

1413頁（5月）一日徳川慶光公母実枝子様薨去、故有栖川威仁親王殿下ノ姫君ニシテ故慶久公ノ夫人ナリ、